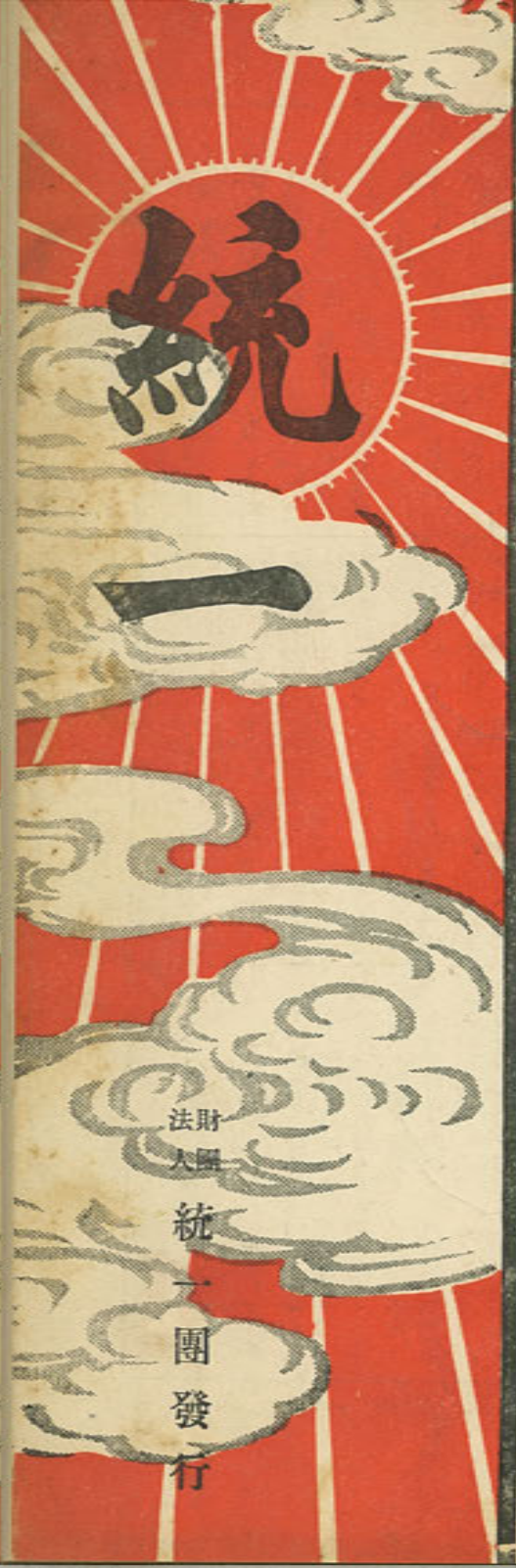


次 目

佛敎の根本と其の應用(其九)……………	本
開目鈔講話(第廿七講)……………	小林多
本尊曼陀羅の意義……………	小河一
保健の要點(完結)……………	池田龍
開館記念會に臨みて……………	上岩
記 事	田野直
○本部團報	長直
○福島支部報	卯英
○團費誌料寄附金及維持費領收	

號月三年四十四第



統

法財人團

統一團發行

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ
テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」
ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方ヲ維持員トス
- ◎賛助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員
トス
- ◎入團 例希留ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用

(其九)

本多日生

佛教信仰の統一

前回には佛教の根本思想として、吾々人間自身に關する事柄に就てお話を致し、さうして佛教の信心といふのは、一方には智慧の心であり、一方には慈悲の心であつて、この有難いと思ふ心が、一方には正しい意味の真理に依つて維持せられ、一方には優しい意味の道徳に依つて光を發するものである、慧心、信心、善心の三つは分離すべきものではないといふことをお話したのであります。

佛教の應用が兎角貧弱低級になるといふことは、吾々民族の知識能力が低い爲に、斯様な風に應用されて來たのであります。佛教それ自身の本領はモット整うた高い意味の宗教であると私には考へられるのであります。どうしても今日及び將來に佛教が復活し且つ發揚されて行くには、やはり佛教の本來に復つて世道人心を指導啓發するのが宜いのであつて、この低く引き下げられた佛教をその儘維持しよらとすれば却つて社會の方が進み、社會の方が向上して行つて、佛教の方が後に打棄てられるやうなこ

とになりはせないか。もと佛教が高い整うたものであつたのを、社會が整はざる爲に、低さが爲に、佛教をそのやうに引下げて應用して置きながら、今度社會が進む時分に佛教を置き去りにするといふことになる。洵に佛教に取つては不運な次第であらうと思ふ。さう意味合を痛感することに於て、この講題の下にお話を進めて居る次第なのであります。

そこで今日は根本の教義の中に於て、佛様に關することを明にして置きたいと思ふ。尙ほ時間が許せば進んで應用に就ての事も申添へて見ようと思つて居る次第であります。

佛様に關する事は佛教教義の最も大事な根本を成すので、吾々人間と佛様の二つが佛教に取つては一番大事な事柄である。下に吾々衆生無く、上にこれを教ふ佛が無かつたならば、佛法といふものは起らない。天地如何に廣しと雖も、宇宙に如何様なものが存在すると雖も、吾々人間と佛と、どちらが缺けても、佛教といふものは發生もしなければ效果も舉るものではないのである。佛教といふものを何か特別の教であるとか、別段の理屈であると考へて居るのが大間違ひで、佛様と吾々が接觸をして、その間に教ひ導かれて行くことが即ち佛教である、この二つが實際のものであつて、その他はこの二つの關係の間に生じて來る事柄に外ならないものである。そこで前講に吾々人間に關する佛教の根本思想をお話したので、これから一方の佛様に就ての事を話しようと思ふのである。

佛様はどういふ方であるかと言へば、歴史的に見ますれば、天竺の迦毘羅衛城の淨飯王、摩耶夫人の

間にお生れなされた悉達太子、それが出家成道を遂げて釋迦牟尼佛とも成りなされた、その一代の事實歴史を見ましても、洵に尊い事柄のみでありまして、モウそれだけでも確に立派な宗教を形づくり、吾を導き得る力は、その歴史の現れの上に整うて居ることではありますが、その現れの事實に含まれて居るところの深い意味合、即ちそれに関する理想を明にして参りますと、そこに教理的の釋尊と申して、表に現れた事實の内面に含まれて居る深い意味合が明になつて來るのである、その歴史の釋尊と教理の釋尊といふことがはつきりして参れば、それで佛に關する思想といふものは整頓するのであつて、あとの事は附けたりである。

それ故に歴史の釋尊を捨て、は佛教の佛様に關する思想といふものは根本が飛んでしまふ。これを佛教の言葉では境、本常身と申すのであります、この意味合は、佛身に關する對手は釋迦牟尼に限るといふことで、境本の境といふのは對手方である。佛様々々と言つて居るその對手方は誰かと言へば、それは何時でもお釋迦様である。それは佛教徒が佛様を有難いと考へて佛様に導かれようとした根本といふものは、お釋迦様に依つて起つた事ナンである。お釋迦様が無ければ佛法といふものは無いのである。佛法といふものが無ければ、その中に現れて居る佛様の名前も何も無いのである。釋迦牟尼佛が世に出現せられて、その教導を受け、救濟を受けて、感謝感激の精神の溢るゝ所、佛様を慕ひ、そこに歴史の釋尊を憶れ、教理の釋尊を憶れる思想といふものが發達するのでありますから、その吾々が佛様を思ふ

て居る、向ふの對手になつて居る根本のその本體たるものを境、本と申すのである。阿彌陀様であるとか、お薬師様であるとか、お地藏様であるとかいふやうなものは、それは別のお經か何かの書かれてから後に起つて來ることであつて、佛敎といふものは、お釋迦様が佛様として有難く考へる根本の方であるといふことを申すのである、常身といふのは、佛様の問題をどのやうな所で研究して、どんな横道へ行かうが、深い所に入らうが、マゴ／＼しようが、戻つて來るのはお釋迦様の所に戻つて來なければ駄目ぢやといふことである。何時でも佛身觀の問題は、境、本常身として、お釋迦様を慕ひ、お釋迦様を深く研究し、さうして横道へ入つても皆お釋迦様に戻つて來なければならぬといふことを、これを學問上の言葉で境、本常身と申すのである。

その意味が法華經に依つて殊に明瞭になり、阿含經に依つてその事實の根本が示されて居る。他のお經でもだん／＼考へれば皆そこへ戻つて來るのであるけれども、ちよつと迷ひが起る。華嚴經を讀めば、盧遮那佛といふのがお釋迦様以外の佛かと思ふやうな考も起る、起るべき餘地は無いのだけれども、小さいお釋迦様と大きなお釋迦様と、斯ういふ風に考へると二つのものになる。小さいと思つたお釋迦様が本當は大きかつたのだと考へれば一つだけれども、小さいお釋迦様と大きいお釋迦様、斯う考へるから二つになるのである。さういふ考へ方の爲に華嚴宗が出來て、俺の方の釋迦は大きな釋迦だ、お前の方の釋迦は小さい釋迦だと言ふから、二つになつて佛身觀が分裂を始めるのである。又阿彌陀様

といふ名前も、阿彌陀經などを讀んで行き居ると、阿彌陀様といふ佛が出來て、それが四十八願を立て、有難さうな事を言つたといふやうなことを慕つて行くといふと、阿彌陀様といふものがそこへ飛出して來るのだけれども、それは皆そのお經を研究するに就て一時の思付きである。佛敎全體を通して見て、さうして今の境、本常身として佛敎の信仰を何處へ落付けるか、何處から出發して何處へ落付けるかと言へば、釋迦牟尼佛に信仰を導いて貰つて、信念の落付きが釋迦牟尼佛に來るといふことにならなければ、佛敎の根本思想は、明にならないのである。それを何處から來てもその思想に反對の出來ないやうに明瞭にしたものが法華經である。どんなお經があり、どんな議論があり、どんな無鐵砲な暴れ者が飛出して來ても、お釋迦様に反對は出來ない、お釋迦様を向ふに廻して左様な議論をする餘地の無いやうに、徹底的に釋尊の尊嚴を示し、佛敎信仰の統一を明にしたものが法華經である。

併しその法華經に纏められた精神は何處にもあることなので、法華經だけがさう言ふのではない、見直して考へて見れば皆さうである。前に謂ふ華嚴經の小さいお釋迦様、大きなお釋迦様を言ふたのも、一つのお釋迦様を小さく見たり大きく見たりするのは、見る方の機縁の觀方の相違で、お釋迦様が二つある譯ではない。ちよつと富士の山は一つであるのを、西から見たり東から見たりしていろ／＼な名前を附けるやうなもので、富士の山が二つある譯ではない。お釋迦様も小さく見たり大きく見たりいろ／＼の觀方をするけれども、それは見る人の觀方の相違で、釋迦如來は完全無缺にして一點の申分の無

い方ぢやと考へることが、佛教信仰の歸結である。斯ういふことになるのである。

それは何處から押へて行けば宜いかといふと、佛様といふものが一人で一切の事をなさる、所謂無限の力をもちなされるといふことを信ずれば事が足るのである。大勢寄つてゝなければ手が足らないとか、或る事柄は出来るけれども他の事が出来ぬとか、眼を癒すには薬師様、罪の深い姿を救ふには阿彌陀様といふやうな具合に受持をきめて來るといふと、澤山佛が寄らなければ一人では間に合はぬといふことになるが、抑々佛教の根本思想に於て、佛様と言はれる方が或る一部分しか働きがない、大勢寄らなければ一切の人類を救ふことが出来ぬといふやうな、多佛綜合して、大勢總懸りて懸らなければ救済が出来ぬものか、それとも又一人の佛が總ての人間の現在未來一切の願業を救済するかといふ、この根本觀念を明にすれば、さういふ思想は消えてしまふ譯である。

ところがどう考へても、どんな低い所から考へても、佛様といふものは大勢寄らなければ間足に合はぬといふやうな、さういふ部分々々の交替的の方ではなかつたのである。交替神教のやうなものであれば、それはいろ／＼の願業に依つて受持が違ふ。火事を守るのはお不動様だとか、孕女を安産さすのは子安の觀音様だとかいふやうな風に、受持を小さくきめれば澤山のものが必要けれども、佛教の根本思想はさういふものではない。婆羅門の思想にはさういふものがあつたけれども、お釋迦様はさういふものを悉く否定して懸つた、それが最初の一歩淺い阿含經の上にも現れて居る思想であることを、は

つきり考へて置かなければならぬ。その思想を完成して縱横十文字に説明したものが法華經であるけれども、この思想觀念が何も法華經に始まつた譯ではない。増一阿含經に斯ういふ風に説かれて居る。

世尊諸の比丘に告げたまはく、若し一人あつて世に出現すれば多人を饒益す、衆生を安穩にし世の群萌を愍み、天と人をして其の福祐を獲せしめんと欲す、云何が一人と爲す、所謂三耶三佛是れなり。

三耶三佛といふことは佛様といふものと同じ事で、たゞ梵語の儘に上つて居るのである。これは一人の佛が出られれば、大勢の者が救はれる、一切衆生を安穩にし、世の大勢の者を愍み、總ての幸福をお與へなされる方ぢやと説いてある。續いて又

若し一人あつて世に出現すれば便ち智慧の光明あつて世に出現せん。(中略)若し一人あつて世に出現すれば無明の大冥便ち自ら消滅せん。若し一人あつて世に出現すれば便ち三十七の道品あつて世に出現せん。是の故に諸の比丘よ、常に當に佛を恭敬すべし。

斯ういふ意味合をズツと續けて説かれて居るのである。「若し一人あつて」、「若し一人あつて」と言つて、一人世に出さへすれば佛様といふものは一切の者を救ふ、それは秋の十五夜の満月が一つ出れば、何處からもそれを眺めて、今夜のお月様は如何にも美しい、モウ二つ三つ一緒に出て呉れたら……と思ふ者が無いやうなものぢやと佛様は自ら仰しやつて居る。一つの圓滿なる十五夜の満月が雲無くしてあ

りありと出れば、月を眺める者は、東京の人も大阪の人も皆満足するが如く、一人の釋迦牟尼佛が圓滿の覺りを開いて佛として出現下された、そこに不足を感じないのが佛教徒の心得といふものである。お釋迦様一人ではまだ足りないなどと言ふのは「どうもお月見をするのにお月様が一つでは足りないから、あつちの電燈も百燭にして照けないか」といふやうなもので、そんな事を言ふのは變な頭腦である、却つて『今夜はお月見だから電燈を消しな』といふのが普通の有様であるが如くに、そこが佛教信仰の心得どころである。

小乗の場合に於ては、過去の七佛未來の彌勒といふものを説くのであるけれども、それは過ぎ去つた佛と後に出る佛で、今現在には釋迦牟尼佛に依つてのみ衆生は救はれるといふことで、釋尊に對する渴仰といふものは燃ゆるが如く強く現れて居るのである。その中心思想といふものが非常に大事な事である。お月見をしようといふのに、昔『三笠の山に出でし月かも』といふ歌があるから、あの何百年前に出た時のお月様を見たい、『今夜の月などは見ても駄目だ』といふやうなことを言つて、數百年數千年前の月見を憶れる必要もなければ、『今夜の月は面白くないからモウ五六年後に出る月を見ようぢやないか』といふのも愚な話である、お月見は今夜出て居る月の光に依れば宜いのである。佛教信者が佛様に救はれるといふならば、過去の佛に救済を求める必要もなければ、未來の佛に求める必要もない、現在の釋迦牟尼佛に頼るのが當然のことである。今年今夜のお月見をするのに、今夜の月はいかぬからと言

つて、障子を閉めて蟲の喰つた本を引張り出して、三笠の山に出し月かもとある、この月はどうぢやといふやうなことを殊更にひねくる必要はないではないかといふことが、即ち阿含の時間の中心に釋迦如來を置いて居る思想である。

そこでどうしてもこれは一人の佛といふことが非常に大事なことになるので、やはり増一阿含經の中には斯う説かれて居る。

阿難よ、若し世の中に二たりの轉輪聖王並んで治むることありとは、終に是の處り無し、阿難よ、若し世の中に二たりの如來ありとは終に是の處り有ること無し。

世の中に轉輪聖王といふものは二人と並んで出ないが如くに、佛様は二人を要しないものである。天に二つの日無く、國に二人の王無く、一人の佛様の世界に二人の佛が出ないといふこの思想は、日本の國體などに於ても一番大事なこととなつて居るのであります、その根本は佛教の思想から出て居ることである。即ちこの阿含に説かれた世に二たりの轉輪王有ること無く、世に二たりの佛出現すること無しといふ思想が、我國の國體の上にも及んで、國に二王無く、天に二日無しといふことになつて居るのである。その根本を佛教が教へて居る、中心思想の根本が佛教にあるのである。然るに今の佛教といふものは中心を失つて居る、『佛様といふものは澤山あります、氣に入つたのを取れば宜い』、『私はお藥師様』……『私は阿彌陀様』……『私は大日様』……といふやうな譯で、佛教とは言ふけれども、佛様とい

ふものが澤山あり過ぎて、どれでも勝手に取れといふことになつて居る。それでは中心思想といふものを失ふのである。佛教は同じものでも、その同じものの中の中心といふものを明にしたのが佛教の大きな思想である。一切を平等に解釋すれば同じものになるけれども、その同じ平等の中に中心を立てるといふことが非常に大事なのである。十方世界に澤山佛があるやうに説かれた場合でも、やはりその擴がつて居る世界の中心に娑婆世界を取り、娑婆世界には釋迦牟尼佛が教主で在らせられるといふことを明にして居るのである。一切經何處を見ても、この世界の教主は釋尊にあらざるなしといふことが明になつて居る。それは王様は世界に澤山あつても、日本國民の忠義を獻げるのは日本の皇室一つであるといふことが定まるが如く、世の中に澤山の親があつても、自分の親といふものは一人であるが如く、孝行すると言へば、太郎兵衛の子は太郎兵衛に孝行するといふことはきまつて居るのである。太郎兵衛と權兵衛と比べて「權兵衛の方が學問もあり練綴も良しするから、これを俺の親に取換へて孝行しよう」といふやうなことは議論の餘地の無いものである。親としてきまつたものに孝行をしなければならぬが如くに、お釋迦様より偉い佛が假にあるとしても、お釋迦様の教の下にはお釋迦様を中心にしなればならぬ。況してやお釋迦様以上の佛といふやうなものは無いのである。佛にはそれ以上ナンといふものがあるものではない。以上があつたら佛様には成れない。佛教徒がお釋迦様を研究するのに、釋尊よりも偉い佛を尋ね出したとしたならば、その時にはモウ間違ひに陥つて居る、日本國民が日本の皇室よりモウと偉い皇帝といふものを探さうといふので草鞋を履き出したら、それは拘々間違ひナンである。出發點が間違つて居る、皇室の御聖徳を明にしてそれに威字威激する情操を養ひさへすれば國民精神は足るのである。釋迦教徒は釋尊に對する有り難さを徹底的に研究し、渴仰し、そこに信心を捧げ得れば佛教徒としては足るのである。それが嫌ならこの佛教の内輪でまご／＼しないで、佛教の外へ出て、破佛家にならうと無宗教にならうとそれは別問題である。けれども、佛教に入つて来て手に珠數を握り、お經の一卷も讀まうといつたならば、モウお釋迦様を絶対としなければならぬ。日本國民であるといふ以上は、日本の皇室を絶対としなければならぬが如くに、佛教徒としてその内面に入つて居ながら、「一つ釋迦にけちを附けてやらう」といふやうなものは、甚だ矛盾した思想と言ふべきである。

その事がお經の中では非常に大事なことになつて現れて居る。それ故にこれは阿含部にもあり、大乘部にも通じて來るのでありますが、釋尊の御降誕のことを天上天下唯我獨尊と申して居る、これは手が二本しかないから、一指天を指し一指地を指して、天の上にも天の下にも我釋迦牟尼が獨り尊いものと申して居るのであるが、手が幾本もあつたならば、西も東も南も北も指したであらう、上と下とを指したといふのは、今の小乗の思想から見れば、横に偉いものを認めないのであるから、そこで天上天下といふ言葉を使つたのである。若しこれを横に擴がりを見るのであるならば、手を横に指して、東にも西にも唯我獨り尊しと仰せられた譯であらうかと思ふ。であるからこれは手が二本しかないから天を指

し地を指したけれども、十方を指したと古來解釋せられて居るので、即ち乾坤を指すと申すのである。であるから釋迦如來、降誕せられた誕生佛の時でも、釋迦如來が一番尊いといふ意識が即ち佛教徒の根本觀念である。何も今更吾々が釋迦様は特に有り難いといふ議論を組立て、申すのではない。抑々釋迦降誕の最初から流れて居る思想が天上天下唯我獨尊であつて、三國傳來皆なこの思想を有つて居るべきである。それを唯我獨尊といふ頭を一つ敲らうと考へて行く所が、誰が考へ出したにしても、どういふ理由があつたにしても、そこに抑々間違ひといふものが起つたと言へると思ふのである。(次續)

釋迦如來はこれ一切衆生の父なり、若し無量億千の衆生の佛教の門を以て、三界苦怖畏の險道を出で、涅槃の樂を得るを見ては、如來爾の時に便ち是の念を作さく、我無量無邊の智慧力・無畏等の諸佛の法藏あり、是の諸の衆生は皆是れ我子なり、等しく大乘を與ふべし、人として獨り減度を得ることあらしめず、皆如來の減度を以て之を減度せん。

妙法華經卷第二

開目鈔講話

(第二十七講)

小林一郎

この間は、大日經の中に二乗作佛とか、或は十界互具とかいふやうなことはない筈である。それをあるかのやうに説いて居るといふことは間違である、これは法華經を本にしなければ出來ない議論であるといふところまで読んで居りました。そこで今日のところは、其の事は日蓮上人が自分一人で決められるのではない、昔から本當に法華經を讀んだ人はさういふ所を見究めて居られるのだといふので、傳教大師の言葉を引用されるのであります。

故に傳教大師云く、新來の眞言家は則ち筆受の相承を泯し、舊道の華嚴家は則ち

影響の軌模を隠す等云云。俘囚の鳥なんどにわたりて、ほのぼのといふうたは、われよみたりなんと申は、えぞていの者はさこそとおもふべし。漢土、日本の學者又かくのごとし。

これは傳教大師が「依憑集」といふ書物をお作りになりました。自分達が信仰を捧げるのには何に依つたら宜いか、何を頼みにしたら宜いかといふことを明にする爲に、この「依憑集」といふものを作られたのであります。その序文の中に斯ういふことを言つて居られるのです。「新來の眞言家」といふの

は、新しく支那から傳つた眞言宗。これは御承知のやうに弘法大師が傳教大師と一緒に支那に留學して、支那で眞言宗の教義を習ひまして、これを日本に傳へた。それで「新來」と言つたので、新しく來た眞言宗は、筆受の相承を派すものである。「筆受の相承」といふことは、印度から善無畏といふ人が支那へ参りまして、眞言宗を弘めた。それまでは支那には眞言宗といふものはなかつたのであります。支那に佛敎が弘まつてから随分長い年月が経りましたたけれど、この間に數へたら十位もありません。か、いろ／＼な宗旨が傳つたけれども、眞言宗といふものは傳らなかつた。一體眞言宗は印度の南の方に傳つた宗旨でありまして、初は中央印度には眞言宗はなかつた。支那に入つた印度の佛敎は、大體印度の中央若しくは北の方の佛敎で、これは餘り専門的

のことになるから詳しいことは略しますが、大體さうであります。眞言宗は南の方に弘まつたから、昔

佛敎が印度から支那に入る時には入らなかつた。ところが支那の唐の時代になりまして、初めて眞言宗が支那に入つて來た。

これは少し話が脱線するやうであります。支那の唐の時代はなか／＼盛な時代で、外國との交通も開けまして、兎に角支那始つて以來唐の時代ほど盛んな時はないといふ位に言はれて居つた。日本とも交通を致しますし、それから中央亞細亞から、歐羅巴といふほどでもないが、土耳其の近邊まで勢力が伸びました。唐の時代は大變なもので、耶蘇敎なども唐の時代に支那に入つたのです。それまでは耶蘇敎は東洋に縁がなかつたのですが、唐の時代に、土耳其古の方に弘まつた耶蘇敎が、今の交通が開けた縁から支那に入つて來たので、日本よりは支那の方が古いのです。唐の時代といふと、日本の天智天皇の頃です。その頃から耶蘇敎は支那に入つて居る、随分古い縁故がある。これは佛敎と縁のない他

の話であります。さういふ譯で唐の時代は盛んなものであつた。

その唐の時代に於て、佛敎も新しいものが入りました。今、善無畏といふ人が印度からやつて來て支那に眞言宗を弘めたのであります。この善無畏といふ人は印度の或る小さい國の國王であつたので、自分の王の位を息子に譲りまして、佛敎の修行を主にやつて、それで支那に佛敎を弘めるといふやうな志を立て、支那にやつて來て、眞言宗を弘めた。當時支那に來て見ると、なか／＼支那には佛敎が盛んである。その佛敎の盛んな中に於ても、一番土臺のシツカリして居る佛敎はどの派だらうかと思つて調べて見ると、天台宗である。天台宗といふのは天台大師が創めになつたので、法華經を中心として立つて居る宗旨なのですが、この天台宗が一番盛んだといふことが判つて來た。それで天台宗の敎を一通り聴きたいものだ。自分は眞言宗で、大日如

來を本尊としてやる宗旨だが、支那で天台宗が一番深いものであるといふ以上は、それに負けるやうなことはないから、天台宗の教義を一通り知りたといふ望を起しまして、いろ／＼探して居ると、その時分に天台宗の坊さんで一行といふ人が居りまして、これは天台宗の方でもなか／＼學問の深い人であつたが、少し世の中に用ひられないで不平を起して居たらしい。それを見付け出して、この一行といふ人を招んで善無畏が聴いた。支那の佛敎は天台宗が一番深いと言ふのだが、天台宗といふものは一體どういふ敎であるかと言つて聴きますと、一行といふ人は何しろその方では研究が深いから、スツカリ話した。天台大師の言つて居る説は斯ういふことだ。さうすると善無畏は驚いてしまつた。そんな偉いことまで言つて居るのか、それでは自分の今まで習つたことでは逆も敵はない。自分は眞言宗を弘める積りだが、ドウモ今聴いた天台の敎の方が餘

程深いのだから、さういふもの行はれて居る所で眞言宗を弘めても、なか／＼弘まりさうもないのだが、どうだらう、そのお前の言つた天台大師の言つたことを巧く應用して、自分の眞言宗を弘める譯にはいかないだらうか、考へて呉れといふ譯です。ところが片方は少し世の中に用ひられなくて不平満々です。それから、それではやつて見ようといふので、飛んでもない謀叛人が出来た譯です。そこで一行が善無畏にスツカト買収されてしまつて眞言宗になつて、自分で習つた天台大師の説を巧く應用して大日經の説明を書いた。それが『大日經疏』といふものである。これは眞言宗の方では一番大事なものになつて居るのですが、この『大日經疏』といふのは善無畏といふ人が書いたのではない。一行が善無畏に買収されて、自分が習つた天台宗の教義を巧く應用して大日經の説明をしたのである。これは今でも遺つて居りますが、これを見ますと、巧く説明して居るの

ですけれども、それは天台大師の教を巧く使つたから上手に説明が出来て居るのでありまして、決して眞言宗の方で言ふ大日如來を中心とした教だけでは『大日經疏』のやうな巧い説明は出来ない筈なのです。これは餘程うまい人を捉へた譯です。それ以來何しろ天台大師の書いたものを巧く應用して、如何にも道理に合つたやうな説明をして居るし、又善無畏といふ人が印度の國王であるといふやうなことを聞いたものだから、その時分の支那の玄宗皇帝もわざ／＼お會ひになつて、この人を深く信じたとはいふこともありませう。そんなことで世間的にも都合が好かつた。又大日經の説明なども巧く出来たものですから、眞言宗は弘まつて行つたのです。それを『筆受の相承』と言ふのです。『筆受』といふのは一行が善無畏の言ふことを聽いて書いたのだが、書く時に善無畏が言はないやうなことで書いた、つまりこじつけたのです。その所を『混す』といふの

は隠して、そんなことは言はないで、善無畏が初から大日經を説明したのはこれだといふやうなことを言ひ觸して居る。それが『筆受の相承を混す』といふことなのです。

私共天台大師のお書きになつたものも少しは讀んで見るし『大日經疏』も讀んで見ると、ソツクリその儘で、天台大師のお書きになつたことをソツクリ使つて説明して居る。如何にもこれは狡い話ですがさういふ風になつて居る。それを傳教大師が露骨に仰しやつた。眞言宗では一行が善無畏の言ふことを聽いて書いたのだが、その書く時に善無畏の言はないうことまで書いてしまつた。自分が天台宗の坊さんだから、天台宗の知識をその儘應用して書いた。それはこじつけたのだ。天台大師のは法華經の説明である、その法華經の説明をソツクリ持つて來て大日經の説明に使つてしまつたのだから、これは随分酷いこじつけたのです。それで日本に眞言宗が傳つて

も、その儘使つて居たといふことは卑怯な話だといふのが『筆受の相承を混す』といふことで、胡麻化して、いゝ加減にして置くのだ、斯ういふことを言つて居られる。

それから、舊到の華嚴家——『舊到』といふのは古くからあるといふのです。華嚴宗といふのは前にも申上げたやうに、奈良朝の頃から日本に傳つて居りますから、これは天台大師よりはモット前でありますので、元から來た方の華嚴宗の者は、影響の軌模を隠して居る。『影響』といふのはどういふのかと言ふと、音がするとそれに響が出ると同じやうに、善い教があると、自然にその善い教に歸依しなければならぬやうになる、斯ういふことが『影響』といふことです。今は『えいさやう』と讀んで居りますが、音がすれば直ぐに響がする。それと同じやうに五年や十年はつまらない教が世の中に幅を利かすこともありませうけれども、結局は善い教には敵はな

い。だから善い教が本當に勢力を持つのです。支那の唐の時代に於て華嚴宗といふものが盛んになりました。併ながら唐の時代よりも前に天台大師が世の中に於てになりました時代、即ち陳から隋の時代に、この華嚴宗といふものが起つた。その時分に華嚴宗を唱へ始めた人は澄観といふ人でありまして、これは天台大師と凡そ年頃が同じ位でせう。或はこの人の方が一つ二つ上だつたかも知れませぬ。天台の方が法華を中心にして教を弘めて居る間に、この澄観は華嚴を信じて教を弘めた。それで初は對抗致しまして、この人は、ナニ法華なんと言つても華嚴より以上に出るものではない。華嚴といふのは釋迦様が本當に覺りを開きになつた、その時にお考になつたことをその儘に打明けられたのだから、これ程上のものはないといふ議論をして居つたところが、この人は洵に正直な人で、天台の本を讀んでスツカリ感心してしまつた。ドウモこれはこ

の方が上だといふ譯で、洵に昔の人は正直なところがありまして、この人は感心して、自分の信者を呼んで言渡した。これは日蓮上人の他の御書にもありますが、皆信者を呼んで、ドウモ今まで皆集つて自分の説を聽いて呉れたけれども、だん／＼天台の説を聽いて見ると、自分のは間違つて居たのだ。今日限り皆やめて呉れ、若し聽くならば智頭といふ人の所へ行つて聽いて呉れ。自分もあの人の所へ行つて聽くのだから……と言つて解散してしまつた。それから自分も天台大師の所へ行つて教を聽いて、一生涯お弟子としてこれに仕へたといふことである。これは天台も偉いが、澄観も偉い。なか／＼斯うはいけないものです。自分が一旦斯うだと思つた事をスツカリ止めてしまつて、他の人の下に付くなどといふことは出来ないことですが。道に昔の徳の高い人で、私の心がなかつたと見ましまして、スツカリ天台に歸依してしまつた。それを「影響」と言ふの

です。天台の影響を受けて、天台の教をスツカリ習つて、自分の説などはスツカリ捨て、しまつた。それが又唐の時代になつて華嚴宗が復活したので、それはどうして復活したかと言ふと、妙なことでありまして、これは何かの機會に申上げたいと思つて居つたのですが、お經といふものは決して一種ではありませぬ。どのお經でも幾種もある。何故ならば、お釋迦様がお説きになつた時に、お弟子が筆記した譯でも何でもないので、大勢の人が語り傳へ、言ひ傳へたものであり、これを後に至つて纏めてお經にしたのですから、法華でも幾種もあるのが當り前だし、華嚴でも幾種もあるのが當り前です。つまり材料が違ふのですから、その材料を集める集め方もいろ／＼違ひませう。斯ういふ譯でどのお經でも一種ではない。だから法華經の支那に譯されたものだけでも六種ある。印度に傳はつたものは十二種もあると言はれて居るのですが、何しろその時にお弟

子を書いたのでも何でもないので、後になつて作れば幾種も出来るのが當り前です。さういふ譯でありますから、華嚴經も梵語で書かれた原本が幾種もあつた譯です。その中の一つを支那に初に譯しましたのが六十華嚴と申しまして、六十卷になつて居る。これは一番早い時代に出來た華嚴經です。ところが唐の時代になりました、有名な玄奘三藏といふ人が印度に參つて、印度に殆ど二十年も居ていろ／＼穿鑿をして、印度から新しい梵語で書かれたお經を持つて歸つて來た。その中に又華嚴の原本があつて、この華嚴經の原本は前にあるのよりはモット完備したものであつた。そこで唐の時代になつて又これを漢譯した。今度は八十卷ですから、八十華嚴と申します。今傳つて居ります華嚴經はいろ／＼あります。が、まア六十華嚴と八十華嚴の二つが主なものです。これを較べて見れば、無論八十華嚴の方が優れて居る。これが唐の時代に新しく漢譯された。それ

て唐の時代に又華嚴宗といふものが甦へつたので、前のは六十華嚴だから、完全ではなかつた。今度は本當に完全な華嚴經が漢譯されたのだが、これに依つて見ると、法華經などよりモット上だといふことを言ひ出した。それで唐の時代になつて又華嚴經が復活つて、それが日本に傳りまして奈良の東大寺が出来、大佛様が出来るといふやうな事になつた。先づ大體そんな状態です。唐の時代に於て前の華嚴宗を始めたのが今申した澄觀でありますが、この澄觀はスツカリ天台大師に負けて、天台大師に敬服して弟子のやうな形になつて一生を終つた。それを華嚴宗の人は隠して居るといふのです。「影響の軌模を隠す」天台大師の教をスツカリ信じて、それで以て自分の信仰の土臺を作つたといふ事を隠して、初から華嚴の方が法華より上だといふやうなことを言つて居るのは、それは華嚴宗の人のこじつけである。

二〇
斯ういふことを傳教大師が今の「依憑集」の中に言つてあるのであります。それだから自分の宗が一番上だと言つても、他の經と較べて見て、果して何れが優れて居るかといふことを決めなければ、唯昔から自分の宗が一番善い宗だといふことだけで押通して行つても、これは無理ではないか。能く公平に考へて、眞面目に考へて見て、果して釋迦様の御本心は何處にあるかといふことを知らなければならぬといふことを茲に言はれるのです。

例へば、淨因の鳥なんどにわたつて——「淨因」といふのは極く野蠻人でせう、野蠻人の居る島へ渡つて、さうして「ほのぼのと」といふ歌は自分が詠んだのだなどと言ふ者もあるだらう。「ほのぼのと」といふのは、有名な古今集にあります柿本人麿の歌だと言はれて居る

ほのぼのと明石の浦の朝霧に
鳥がくれ行く船をしぞ思ふ。

といふのですが、これは實は人麻呂の歌ではないのです。そんなことを穿鑿する必要はないけれども、昔から人麻呂の歌として傳つて居る。日蓮上人當時には歌の穿鑿などは無論しませんでしたから、この「ほのぼのと」といふ歌は人麻呂の歌として傳つて居つたことでありませう。その歌を人麻呂の歌だと知らない野蠻人の所へ行つて「斯ういふ歌を俺が詠んだ」のだと言ふと、大勢の人が感心するだらうけれども、本當に歌のことを知つて居る人は「何だ、出たらめを言つて居る、あの歌は人麻呂の歌ぢやないか斯う言つて、その出たらめを信じないだらう、それと同じだ。世の中の本當に佛教のことの解らない人間の中に行つて、自分の宗旨の教が一番良いと言へば、大勢の人は信ずるかも知れない。けれども、本當のことが何時までも隠れるものではない。結局は本當のことが現れるのである。「えぞていの者」つまり「えぞ」のやうな文化程度の低い、物事のよく

解らない者はこれを信ずるだらう。「さこそ」さうだらうと思ふけれども、本當のことは結局判るのだ。支那や日本の學者などもその通りで、佛教の眞の精神を辨へないものだから、それで眞言宗や華嚴宗などの人の言ふことを本當だと思つて居るのである。

ところがさういふ教もまるで無駄になるのではないので、唐の時代の天台宗の坊さんで良詒和尚といふ人がある。日本から智證大師といふ人が支那へ留學致しまして、この智證大師といふ人が良詒といふ人を先生として天台の教を習つて來たといふのであります。これは智證大師の「授決集」といふ書物に出て居ります。

良詒和尚云く、眞言・禪門・華嚴・三論、乃至、若し法華等を望めば、是接引門等云云。善無畏三藏の闍魔の責にあづからせ。

給しは此邪見による。後に心をひるがへし、法華經に歸伏してこそ、此責をば脱させ給しか、其後善無畏、不空等、法華經を兩界の中央におきて、大王の如くし、胎藏の大日經、金剛の金剛頂經をば、左の臣下の如くせし是也。日本の弘法も教相の時は華嚴宗に心をよせて、法華經をば第八に置しかども、事相の時には實慧・眞雅・圓澄・光定等の人人々に傳へ給ひし時、兩界の中央に上の如く置れたり。

良語和尚が言ふのには、眞言とか、禪とか、華嚴とか、三論宗とかいふやうな宗旨は、これは皆相當に善いことを言つて居るけれども「法華經を望めば」法華經に較べて見ると、法華經の方が深いので、これは法華經に入る「接引門」手引をする、所謂準備的の教と思つて宜い。斯ういふことを言つて居る。

も、學んだことは無駄にはならない。併し梯子の途中で止つてしまつたのでは仕様がな譯であつて、下の段を離れてその上に行かなければならぬ。更に又その段を離れてその上に行く。結局は一番上まで行かなければならない。

それで自分の立場に囚はれて、それきり止めるといふことが所謂執着であつて、それからそこを離れてモット上に行くといふことが解脱です。解脱をしなければならぬといふことはさういふことです。今までの行掛りを捨てるといふことなのです。なんだか解脱と言ふと、世を離れてしまつて山住ひでもするのを解脱と思ふけれども、さうではない。梯子段の途中で止つてはいけない、上に昇るのにはそこを捨てなければ昇れませぬ。又上に昇るのには今までの行掛りを捨て、モット上へ〜と行く、それが解脱といふことです。その行掛りを捨てられないのが執着といふことなのです。ドウモ吾々には執着

これが本當の教なのです。前にも申上げたと思ひますが、佛の教といふものは、方便の教もあれば、眞實の教もあるのですから、この低い方の教を學ぶといふことが必しも役に立たない譯ではない。

譬へて見れば梯子みたいなものです、この梯子を昇つて行つて二階に来るのです。いろ／＼な教といふものは梯子みたいなものです。何宗々々と言つても、梯子みたいなものです。どれでも人間を教へ導くことを目的としない教といふものはありはしないけれども、極く浅い教もあれば、深い教もあれば、佛様の本當の心持をお説きになつたものもあれば、そこへ行くまでの準備的のものもありませう。だから各宗といふものは皆この梯子だと思へば宜いのです。結局この一番上の所は佛様の境界で、佛様が自分で信じて居ることをスツカリ打開けてお説きになつた。そこに行く順序として順々に昇つて行くのです。さういふ風に考へれば、どの宗の教義を學んで

がある。今までやつて居るからこれで宜からうといふことで、モット上に行くといふことを考へない、凡夫はドウモ執着があるので、執着を捨てればだん／＼解脱して行く。その立場を離れて行くことです。私共は絶えず解脱しなければならぬ。

私が明日の朝起きた時には、今晚までの私を解脱して居なければならぬ、モウ一步進んで居なければならぬ、明後日の朝起きた時には、明日の晩までの私を解脱して居なければならぬ。モウ一步々々と前へ進んで行かなければ、凡夫たる吾々が佛たる境界に到達することは出来ない譯であります。ところがドウモ行掛りに囚はれるのです「まあこの邊で宜からう」といふ心持になる。ドウモ人間は執着が多いものだから、なか／＼解脱が出来ない。それでこの執着を捨て、是非解脱しろと言ふのであるが、それがなか／＼出来ないから、已むを得ず折伏をやるのです。「何をグズ／＼して居るッ、そんな所

に居ては仕様がなではないか」と言つて、激しく責めて、自分の立場を捨て、モツと上に行かせる。それが所謂日蓮上人の言はれた折伏といふことである。だから折伏といふことは幾度も申上げるけれども、慈悲の心持の現れであつて、梯子の途中に居る人を氣の毒だと思ふから、大きな聲で「何して居るのだ、何時まで其處に居るのだ、モツト上つて来い」と言ふ、それが折伏です。それを履違へて、何でも他の宗の悪口を言つて喧嘩するのが折伏だと思つては間違つてす。

それでどの宗でも相當に善いことは善いだけれども、そこで止つてはいけぬ。それで良語が言ふのには、眞言、禪門、華嚴、三論などの宗旨は皆善いことを言ふが、それは法華と較べて見ると「接引門」法華經を信じさせる準備としてさういふことを習ふのは宜しい、丁度梯子の途中に居るやうなものだ。併しそれで止つてはいけぬ。それだけ習つた

ならば、モツと進んで佛の眞實の教を學ぶといふ心持を起さなければいかぬといふことを言つて居られるのであります。これは洵に尤もな説だと思はれます。

「善無畏三藏の閻魔の責にあづからせ給しは此邪見による。後に心をひるがへし、法華經に歸伏してこそ、此責をば脱させ給し」これは善無畏といふ人が、先刻申したやうに印度から支那に渡りまして、支那に法華經を弘めて居つたのであります。或る時病氣をして死んだ。ところがその周圍の人が又いろ／＼心を盡して介抱したので、一度息が止つたのが、又息を吹き返して生返りまして、暫く又生きて居つた。その息を吹き返した時に、善無畏が周圍の人に話した。それがこの話の本なのです。これは支那に「高僧傳」といふものがありまして、いろ／＼な坊さんの傳説を集めたものがあるのであります。が、その中に書いてある話です。善無畏が眼を醒し

てから皆に話した。一度死んで又生返つたのだから、今死んでる間に自分は閻魔様の前に引立てられたやうに思つた。それで閻魔の所へ引立てられて、「貴様はドウウモ間違つたことをして居る」と言つて、非常に責められたと思つたら又息を吹返した、斯ういふことを話した。高僧傳の中には唯それだけしか書いてありませぬが、日蓮上人がその事實を解釋して、一體善無畏といふ人は印度に居つた頃に法華經を一度習つて、法華經を信じたことがあつた。後に至つて大日經とか華嚴地經とかいふやうな眞言のいろ／＼な經典を讀んで、この方に信仰が移つた。けれども心の中では何だか濟まない／＼と思つて居つたのだ。それが今の死んだ時の夢であります。か、さういふことに現れた。ドウモ一度法華經を習ひながら、法華經を捨てたといふことは濟まないナと思つて居た。殊に支那に來てから天台大師の先刻申したやうな説を聽いて、それが善いと思ひながら、

一旦自分が眞言宗の坊さんになつたから眞言宗を捨てる譯に行かないので、天台の説を應用してこじつけて大日經の説明などして居るものだから、自分の心に濟まないと思つて居たのでせう。その濟まないと思つたことが、圖らず死んだ時の夢に現れて、閻魔の應に引立てられて閻魔様に責められた。斯ういふことなのでせう。これは何も不思議ではない、心の底に「これでは濟まないナ」と思ふことがあれば、夢にでもそれが現れるといふことは何にも不思議なことではない。さういふことだらうと思はれる。

少し亂暴なことを言ふやうですが、ウツカリする人と、人間が一生涯に自分を欺いて欺き通して死ぬ人が随分あるのです。「これではいけないナア」と思ひながら、行掛りに引摺られて、直すことも出来ないで、いけないナ、／＼と思つて死んでしまふ。さういふ人は恐らく閻魔様に責められた夢ぐらゐる見えてせう。そのことを今の善無畏の話が能く物語つて居

る。私共はさういふ事を讀んで見ると、ハッと思ひます。人間が自分の心を偽つて、出たらめをして一生を終つたら、死んだ後で閻魔様の責を受ける位なことになるだらう。その位の夢は見るだらうと思はれる。自分を欺くといふこと程恐ろしい罪はありません。人を瞞す前に自分を瞞して居るのですから、自分を瞞すといふことは大きい罪です。これは閻魔の廳に引立てられるでせう。確にその事を善無畏の事蹟が能く物語つて居ります。善無畏が一度死んだ時に閻魔の廳に引立てられて、閻魔様に叱られたことを経験して居る。それから目が醒めて、又生返つてから後には法華經に歸依致しまして、善無畏は晩年には法華經を受持し、讀誦して終つたといふことであります。そこで初めて自分の心が落着いたのでありませう。

善無畏の後から來たのが不空といふ人で、これも印度から來て眞言宗を弘めたのであります。善無

畏、不空等は、法華經を兩界の中央において大王の如くにして居つた。この『兩界』といふことは、これは眞言宗の教義ですからどつちでも宜いやうなことですが、時々出て參りますから、斯ういふ機會に一通り申上げたいと思ふ。眞言宗の方では胎藏界、金剛界といふ二つの世界を立てるのです。眞言宗の曼荼羅といふものがあります。その曼荼羅も胎藏界の曼荼羅、金剛界の曼荼羅と二つあるのです。『胎藏』といふことはどういふことであるかと言ふと、お母さんの胎の内に子供がスツカリ入つて居るといふやうな意味から胎藏と言ふので、胎藏といふことは、今の言葉で言へば自然といふことです。眞言宗の方から言ふと、大日如來といふのが根本の佛様である。この大日如來の力が顯れて自然の一切の物になつたと言ふ。山でも川でも、草でも木でも、人間でも獸でも、皆これは大日如來の力の顯れたものだ、斯う言ふのです。だから大日如來が一切の本だ

と言ふ。そこで大日如來の力が顯れて自然の一切のものになつた。その有様を見たのが胎藏界といふことです。だから胎藏界といふのは自然の有様をある通りに見た、その事を説いた。これを胎藏界と言ふ。胎藏界の曼荼羅といふのはこれを描いたものである。大日如來といふ一つの佛様が、山にもなれば、木にもなれば、草にもなれば、人間にもなれば、覺つた人間にもなれば、迷つた人間にもなる。一つの佛様が顯れて總てのものになつたといふことを畫に描いて現したものが、胎藏界の曼荼羅といふものなのです。まあ一々のものに付ての説明はいろ／＼あります。根本はそれなのです。

それから『金剛』といふのは、人間の智慧の大きい優れて居ることを現したもので、智慧の意味です。それで自然の有様を人間の智慧で照して見て、人間はそれをどう理解するか、どう解釋するかといふ、人間の智慧に依つて照されたる世界を描いたも

のが金剛界です。それだから胎藏界とは自然の儘を説いたもの、金剛界とは人間の智慧で照して見た天地萬物の有様を説いたもの、斯ういふ意味です。まあ眞言宗の方の本を讀むと、こんなことではなかなか承知しないでせう。何だ、そんなに簡單に片附けてしまつてはいけなと言ふのでせうけれども、吾々が考へると、自然の儘を現はす、これが胎藏です。人間の智慧でその意味を理解し、解釋して、これを明にする。これが金剛です。胎藏とは自然の儘の世界、金剛とは人間の智慧で照して見た世界。斯ういふやうに私共は見るのですが、さうして見て行つて大體説明がつくのです。ところが専門家といふものは厄介なもので、いゝ加減なことを言つて、それではいけないと言ふ。いけないと言ふけれども、聽いて見れば何でもない、同じことを言つて居るのですけれども、何とか難しく言ひたがるものです。私共がこんなことを説明するの

を眞言宗の人が聴くと、彼奴は淺薄にしてしまつて仕様がな言ふかも知れませんが、極く大體に付て見ればさう思へる。胎藏界の曼荼羅といふのは自然の有様を描いたもの、金剛界の曼荼羅といふものは、それを人間の智慧でどう解釋するか、どう説明するかといふことを書現したものだ。斯ういふ二つの曼荼羅を立てるのであります。それが眞言宗の根本になるものであります。金剛界、胎藏界といふものを二つ立てる。それは要するに大日如来といふ一つの佛様、佛様といふのは總てのもの、の根本の力でありますが、その本力が現れて天地萬物ともなれば、又人間の智慧の働ともなつた。斯ういふやうに見るのであります。それで眞言宗の方ではこの二つの曼荼羅を立て、いろいろ祈りをしたり、授戒をしたり、又灌頂をやるのであります。

華嚴宗の法藏法師、天台を讀して云く、思禪師・智者等の如きは、神異に感通して述は登位に參はる、靈山の聽法憶今に在り等云云。眞言宗の不空三藏・含光法師等師弟共に眞言宗を捨てて天台大師に歸伏する物語に云く、高僧傳に云く、不空三藏と親り天竺に遊びたるに、彼に僧有り、問ふて曰く、大唐に天台の述教有り、最も邪正を簡ひ偏圓を曉るに堪へたり、能く之を譯して將に此土に至らしむべきや等云云、此物語は含光が妙樂大師にかたりしなり。妙樂大師此物語を聞いて云く、豈に中國に法を失ふて之を四維に求むるに非ずや、而も此方に識ること有る者少なし、魯人の如き耳。

日蓮聖人撰時鈔

日蓮聖人の顯されたる

本尊曼陀羅の意義 (一)

佛子 河合 陟 明

如来の滅後に於て 佛の所説の經の因縁及び次第を知つて 義に隨つて實の如くに説かん 日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く 斯人世間に行じて 能く衆生の闇を滅し 無量の菩薩を教へて 畢竟して 一乘に住せしむ 是故に智有らん者 此の功德の利を聞いて 我が滅度の後に於て 應に斯經を受持すべし 是人佛道に於て 決定して疑有ること無し

南無妙法蓮華經

妙法蓮華經如来神力品

- 一、緒言 二、本佛の知見と教化 三、本佛を中心としたる十界の佛性開顯 四、統一的解釋の必要 五、本佛三輪の妙化 六、本佛の十界應現 七、衆生と本佛 八、本佛應現の二様式 九、應現の體用一多 十、本佛の本述觀
- 十一、本佛への推功歸本 十二、反價值的應現 惡の形に於ける善 十三、無縁の慈悲 本佛の應身常住 十四、本佛の三身常住 十五、本尊と我等との感應 十六、法界實在の本尊 十七、本佛の宇宙的法術的創作

一、曼陀羅は 釋尊が 佛教の統一的歸結として 法華經を説かれ 此中に於て 釋尊の大覺に依つて展望し示教せられたる 宇宙の實相を、日蓮聖人が 特に、宗教的信仰修行の對象として 顯示せられたものである。

二、釋尊は 自己が世に出現した その眞意本懷を 完全に説き明かされた 法華經の如來壽量品に於て、自己の本體を 開顯して、

我は 實に五百塵點劫よりも更に古き 久遠成道 乃至

無始本有 常住不滅の 本佛なり

といふ絶對的大事實を宣言せられた。

即ち 本佛釋尊は 宇宙(法界)を 久遠無始の元初無き元初よりこのかた 常恒に 證得し 領有し 教化し 利益せられてゐる、その有様が 曼陀羅なのである。故に

曼陀羅は、久遠本佛釋尊の 無始以來の

イ、知見の内容 照靈の對象であり、此に加被せらるゝ

ロ、慈悲活動による教化救済の状態であり、

ハ、宇宙一切の生類が 本佛の教化を受けて 自己本然の尊嚴性を發揮してゐるところであつて、即ち

宇宙全體の價值實現の妙相である。

三、本佛釋尊の知見によれば、

1、無始以來 宇宙には 十界の生類が生存してゐる。

2、しかも差別せる十界の一界ごとに、各々その内面的本

質には 他の九界を具してゐて、即ちいはゆる十界五具であるのである。

3、特に十界悉く 就中 九界一々の迷者も皆その本質に 佛界の性相力用を内在してゐることが、佛道成就の可能原理として 大切なことである。

4、然しながら、一切生類の本具の佛性は 凡て佛教に於ては、事物の發生成長の原則を「一因非生」と稱し、即ち物は單に其だけの力 即ち其物だけを唯一つの原因としては發生しない、必ず其に外的力が加つて 其物の生育發展力を誘發助長すること、宛かも 稻米の種子たる根を成長せしめるには、之を先づ田に蒔き 雜草を取り 水分や肥料や 地中の營養や日光や また風雨宜しきを得る 等の自然的及び人為的の種々なる力が加つて 始めて立派に成長し收穫を見るに至るが如く、而てかの内在的自發力を「一因」といひ、この外顯的誘發力を「緣」といふのであつて、かゝる内外の二重原因によつて 事物は發生成長するものであるから、今こゝに思惟の對象たる 九界の生類の本具内在の絶對價值たる佛性も、この九界の既に已に大先達の師として 久遠太古の昔に既に實に佛性を完全に開發し盡して、即ち久遠にして實に無始の本時より既に實に佛道を成就し、絶對の大覺と無限の妙用とを以て 九界ないし十界全宇宙に働き掛けられ居る本佛、佛性の親たり 九界の師主たる この本佛の、その圓

滿無窮の 神通自在の 慈悲活動たる 教化救済の力に緣せられ(觸發せられ)て、始めて單に素質的可能に過ぎない九界の潜在的佛性が、その無明に蓋はれたる 不覺的また未覺的狀態より脱し 飛躍して更に實際的決定的に開發し顯動し 自覺的に向上するに至るのである。

5、是の如く 凡て佛性の開發は 本佛の慈悲活動たる 向九界的(向衆生の)開發の大努力に 觸發せらるゝことを 必須不可缺の條件とすることが、また同じく九界の生類の佛道成就する爲の決定原理として、更に同時に大切なことである。かの衆生の本具内在の素質性を 正因佛性といひ、又は 理佛性ともいひ、この本佛活動の開發的決定縁を 正因佛性の心田に對する 本佛の下種といひ、衆生の佛性として

は 正因の開發・發展しつゝある了因佛性といひ、又その開發せられ働き出しつゝある状態を 事佛性または 行佛性と

いふ。即ち 九界の自力(内熏)と 本佛の他力(外熏)と

内外相依り、自他合力、能所感應し合成して こゝに我等の佛性は發現し開展し向上し實證されてゆくのである。

6、従つて、宇宙はこれを大觀するときは 佛界を中心として、これを向上の縁として 生起活動してゐるものである。故に前にいはゆる

宇宙全體の價值實現の妙相とは、

九界 總じていへば 十界の總てが 本佛の圓滿無窮の大

質には 他の九界を具してゐて、即ちいはゆる十界五具であるのである。

3、特に十界悉く 就中 九界一々の迷者も皆その本質に 佛界の性相力用を内在してゐることが、佛道成就の可能原理として 大切なことである。

4、然しながら、一切生類の本具の佛性は 凡て佛教に於ては、事物の發生成長の原則を「一因非生」と稱し、即ち物は單に其だけの力 即ち其物だけを唯一つの原因としては發生しない、必ず其に外的力が加つて 其物の生育發展力を誘發助長すること、宛かも 稻米の種子たる根を成長せしめるには、之を先づ田に蒔き 雜草を取り 水分や肥料や 地中の營養や日光や また風雨宜しきを得る 等の自然的及び人為的の種々なる力が加つて 始めて立派に成長し收穫を見るに至るが如く、而てかの内在的自發力を「一因」といひ、この外顯的誘發力を「緣」といふのであつて、かゝる内外の二重原因によつて 事物は發生成長するものであるから、今こゝに思惟の對象たる 九界の生類の本具内在の絶對價值たる佛性も、この九界の既に已に大先達の師として 久遠太古の昔に既に實に佛性を完全に開發し盡して、即ち久遠にして實に無始の本時より既に實に佛道を成就し、絶對の大覺と無限の妙用とを以て 九界ないし十界全宇宙に働き掛けられ居る本佛、佛性の親たり 九界の師主たる この本佛の、その圓

慈悲たる 教化救済活動と相俟つて 各自の佛性を開發顯現してゐる相であつて、これが眞の實相といふものである。それ故、

曼陀羅は

い、中心觀としては 本佛の圓慈觀を表し、この本佛なる

統一的中心を確立したる

ろ、全體觀としては 佛界縁起の宇宙觀を表し、更にこの

宇宙に存在する一切生類の

は、個性觀としては 十界の佛性開顯觀を表すものであ

る。

四、曼陀羅とは、元來 輪圓具足 功德聚 諸佛集三昧 淨

壇 等の意味を有つものであるが、かゝる

A、圓滿具足的解釋の上に 更に進んで

B、統一的解釋なるものをせねばならぬ。

この統一的解釋 或は 一元的説明とは、上述する如き

本佛中心の解釋であり、一切を本佛と關聯せしめて其の眞意

義を發揮するところの説明である。即ち

本佛が 智慧 慈悲 威神力を發して、

宇宙の十界一切を 受け用ひ 運用 活用し、

こゝに十界一切を 蘇生し 根活し 善化し 菩提化して

一佛乘(一佛道)に入れしめられたとき、一言にしていへ

本佛に依つて統一し開顯し功德化せられた十界なるものが始めて

曼陀羅の本来の意味たる 輪圓具足 功德聚 等の意味 眞價を發揚するものである。

五、凡て十界の生類のはたらきは、意志より起る種々の心作用と、口に發する言語と、身體に表す行爲と、の三つに分類ないし總括することができる。これを

身口意の三業といふ。

本佛のはたらきも 亦この身口意の三業としてはたらかれる。即ち 本佛釋尊は 内に宇宙の根本原理と 十界の生類の本質とを大觀し、更にその現實個々の罪福苦樂 向上墮落の實狀と それを一貫して三世に連続する倫理的・心的因果の理法 即ち十如是律とを諦觀し、又更にこの善因善果 惡因惡果といふ因果應報の理法活力は 宇宙人生物心一切を貫いて塗らざる曲ぐべからざる 森嚴なる大規律であり、宇宙法であり、一切の個性的人格實在の内面的根柢 即ち宇宙根柢より常に普遍的に發現する心的活力として 宇宙意志であり、超個人的絕對法則として永劫不變なる 無始以來の佛法であるが、而も今一歩んで、慈善根を實踐し積聚するところその功德力は竟に發して、いはゆる『定業をも亦能くこれを轉じ』得て、運命を打開し 果報を向上し 境遇を變へ

妙法蓮華經如來壽量品

「重きを轉じて軽く受くる」といふ いはゆる悦ばしき智慧 福音的倫理の法則の 圓融微妙に宇宙に充足せることをも 證得せられ得り、而て又、宇宙の絕對的進化 宇宙生命の絕對目的の何たるかをも、また明かに證得せられ居り、かくの如く 宇宙の根本原理を見開きたる大智慧よりして、實在の本體と現象とを達觀し、必然と自由とを雙照して、寸毫も誤り無き 大眞理と大智慧と大慈悲との深密一體なる救済的大意志、即ち上述せるいはゆる宇宙大生命 宇宙大精神 宇宙的絕對意志を 一大人格に完全に體現して 宇宙生命の絕對的進化の最終最高目的たる 人格的にして而も宇宙的なる大人格的絕對意志 いはゆる法に於て徹底自在にして活用無碍なる如來法王としての大救済的意志より發して、外に普く十界に 身を現し 口輪を轉じて 或は説き 或は行じ 以て衆生を教化される。しかも其が上は過去久遠無始に通り 下は未來永劫無終に及び、宇宙十方無盡際に通く、時間空間の縱横無限を包括して 自在無碍にして暫くも息む時が無い。諸の衆生は 種々の性 種々の欲 種々の行 種々の憶想 分別を有するを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して 種々に法を説く。作す所の佛事 未だ曾て暫くも廢せず

本佛のかくの如き無始盡十方世界周遍の教化活動によつて、宇宙一切の生類が 無明の闇を破り 煩惱の穢を對治し

迷妄罪惡を解脱し 生死流轉を出離して 菩提に向ひ 佛性を開發して 佛道を成就すること、宛も轉輪聖王の輪寶が 大威勢を發して廻轉し あらゆる有形無形の魔軍を粉碎し 天下を平正ならしむるに窮り無きが如くである。故に

本佛の身口意三業の この雄大無外にして微密秘妙なる活動 教化 利益 恩徳を 輪王の輪寶になぞらへて 本佛三輪の妙化 といふ。

大涅槃經に曰く、

譬へば聖王所有の輪寶の 則ち能く一切の怨賊を消滅するが如く、如來の法を演ぶるも亦復是の如し、能く一切諸の煩惱賊をして 皆悉く寂靜ならしむ。

大寶積經に云く

もし帝王有らば 國界を安住し 群生を撫育して快樂極り無からん、如來法王も亦復是の如し、大千界に王として一切三乗の業を攝化し 十力の功德圓滿成就す。

かくの如き 本佛の一切衆生（一切生類）濟度の内面的大意志力を 意輪の感應といひ、而てかゝる蓋機三昧の、即ち一切衆生の千差萬別なる心理狀態を 如實に照蓋して 毫末の錯謬なく、而も何を以てか之を濟度せんとして大慈愍念 秒時も衆生を捨てず、法界も衆生も徹視徹見し盡したる大禪定三昧の心海には、無限の智慧あり 無限の慈悲あり 無限の

誓願あり 無限の功德力あり、この無際涯 無窮盡の 智慧 誓願功德蘊在の大禪定意志より 發しては亦妙應無謀の秘密神通 難思不可測の力用大化あり、法性湛然として寂靜不動 しかも常寂常照にして隨應極り無き この大慈意輪の感應より發する具體的・積極的なる外面的發動を 身口二輪の淨用といひ、又その感化力・救済力・化益を 形聲の兩益ともいふのである。

六、かくの如き 本佛の三輪の妙化は、悉く衆生を救済せむが爲に その衆生に應じて 即ち感應して この衆生のまた同じく身口意三業に 冥顯自在 隱約微密に 働き現れることであるから、これを又 本佛の應現 といふのである。

本佛の三輪常恒の大化も 應現自在の淨用も 遍く皆十界の一切に圓滿することは、前來屢述せる如く明かである。此に於て 曼陀羅とは、 本佛三輪の妙化によつて起り、 本佛と本佛起用の形聲を示し、一言にしていへば、 本佛の應現を示す、即ち 本佛の十界應現の體用 或は 妙相を示せるものである。

七、凡ての實在が 業の力と 因縁・因果の理によつて、現存在としての 十界各々の果報を感得し 受用しつゝあるこ

とは、九界佛界 迷悟兩者に通ずる普遍の理法であつて、いはゆる業感縁起は眞如縁起に根據し、眞如縁起は業感縁起を包容し、大乘・小乘を一括して 佛敎の教理は 無始無終に亘る 眞如的業感縁起論といふべく、從つていはゆる人格的・意志的・業なるものに、無明意志的行業と 法性意志的行業と、善業と惡業と、眞妄二類 染淨二面の縁起と因果を分つべきであるが、この中に於て、その生存の實狀が 人格の本質としては 自覺的・自律的であるにも拘らず、實際には甚だしく他律的にして、自己の意志に反し 欲望に違ひ自由を得ずして 生滅變化を免れざる 必然の運命に置かれてゐるのは、いふまでもなく 迷者たる九界の生類の現實なのである。

即ち九界の衆生は 畢竟して未だ 實在認識の惑源たる 根本無明を破らず、いはゆる元品の法性 中道 實相 第一義諦 眞如性の佛性を 無限に開發して 完全にこれを人格に體現せず、未だ究竟して 明 如實智を體得せず、如來藏を有しながら 煩惱業を招集して有爲無常 生死轉變の苦界を脱せず、實に永劫の無始以來 隨眠して「不了一法界の惑」を斷破せざるに由るのである。之に反し 佛界 乃至 本佛は久遠塵劫の昔 既に實に菩薩道を行じ 且つ滿じたる修因報得の大果報として、しかも有始に非ず 實に無始以來 無始無明を破つて 全く生死遷滅を解説し、無始の實相

とその存在の意義とを覺了し、大涅槃の祕密蔵に入り了つて安住し 宇宙絕對の精神的大生命たる 法性眞如を一大人格に於て、その本具のまゝに創造し開展し體驗し修成して、これを果徳の上に顯現し、かくてその法界性ながらに全法界を覺照證得し、これと同體一如し 果上自在の絕對的大意志力を以て、これを受用し 遍く十界の全人格を統化せらるゝのである。

その九界一切の迷者救済のための 千變萬化端睨すべからざる 神通難思の應現活動に於て 地獄・餓鬼・畜生の三惡道にさへ乃至十界の總てに互り 權現出沒といふことはあり、その大勢威猛の力用妙化は、まことに測り知るべからざるものであるが、本佛の本身そのものに於て 迷者流轉の輪廻界に 實生實沒するといふことは決して無いのである。

八、一人格の個體としての相對身たる本佛は、宇宙大生命たる三千法界を 自己の絕對身として 一念に受用し支配する 絕對の自在者であるから 衆生を救済するためには、いかやうにも自己の身を分けて、十界の身土 色心 いかなるものにも變化することが出来る。即ちいかなるものにも爲ることが出来る、現れることができる。これを即ち 本佛の分身作用 といふ。即ち本身と分身との關係である。本佛には かく如何なる色像(形像)でも無限に 自在に 建立し 化成する無極の力がある、作用がある。これを、

如來建立如是色像無極之力(正法華經)

如來秘密神通之力 如來一切自在神力(妙法華經)といふのである。

而て本佛の應現 といふことには 二通りの仕方 があるのであつて、

(一)は 十界の一切の生類 いかなる個體に對しても、その無始本有の人格の獨立存在 即ち自覺的 個別的 三世無限連續の 歴史的 因果體系を認めて、この人格を 本佛が受け用ひて、これに應じ現れる、即ち、本佛が 自己自身以外の 他の人格(他身)を受用し 他身上に 應現する といふ、即ち 本佛が他人格を通じて自己を現す、本佛が他人格となつて表れる といふ仕方 或は場合と、

(二)は、本佛が 自己自身の身を變じて現れる、即ち 他人格(他身)を少しも用ひずして、全く本佛自身が 十界身土のいかなる分身をも造つて 化現し 以て衆生に應ずる といふ仕方 或は場合とである。

(一)(二)の何れの仕方の場合に於ても、本佛の衆生救済のための 應現といふことには變りがない。凡て本佛の應現 即ち又 本佛の三輪の妙化 といふことには、その現れ方 様式 種類 範圍 程度 等に於て、具さに論ずれば 種々あるのであるが、悉く 應現 といふ限

り、本佛より衆生への直接作用 である、本佛がその絕對身を 有限相對的に 自己限定して衆生にまで(衆生への)直接的自己展開活動なのである、本佛が衆生への自己啓示である。即ち (一)(二)何れの應現も、

本佛の十界應現 及び本佛の分身作用 といふことができる。嚴密にいへば、

(一)は 十界への應現であり、

(二)は 十界となつての 十界としての 應現であるが、何れも等しく、本佛の 十界の應現 と言表すことができる。而て又これは、何れも、

本佛が 常に 己身として現れる 己事を現す のみならず、總括して言はゞ、

己身を他身となし、他身を己身となし、

己事を他事となし、他事を己事となす、

はたらしき といふことができる。而てこのはたらしきは、即ち、

本佛の 意輪の感應より起つて 身輪の示現と 口輪の説法、即ち 形聲の兩益 の二通りとなるもの なのであるから、

法華經にいはゆる、

或は説くこと 己身 他身 己事 他事 となり、

或は示すこと 己身 他身 己事 他事 となる。

前者は 聲益（口論の説法）であり、後者は 形益（身輪の示現）である。

九、本佛の應現は、或説 或示 己他 身事の何れにせよ、本佛より衆生への直接活動であるから、(一)の場合はいふまでもなく、(二)に於ても、即ち 總括して如何なる場合でも、本佛が應現せらるゝ限り、この應現といふ事實 或は形式に於て、而てその内容を含んで、本佛と九界の衆生 乃至 十界の人格とは 同身一體となる といふことができ。或は 同根一體 といつてもよい。

換言すれば、應現の根源は いふまでもなく悉く本佛である、應現とは 本佛の應現なのであるから、應現せられたもの 即ち 九界 或は 十界と 本佛とは、同根一體となる、ことができるのである。嚴密にいへば、作用が一つになるのである、或は、應現といふ作用に於て一體となるのである。

本佛自身の分身化現の場合 はいふまでもなく、他の人格に本佛が應現した場合でも、二者は同根一體となる（である）といふことができる。元來 同根一體といふことは、本佛の化身分身作用のときにのみ用ふべきであらうが、今は廣く、應現作用のある限り、本佛と十界衆生とが同根一體と考へるのである。而て かくの如く、本佛より應現の作用が出る、のであるから、應現の作用は

平等一如の一本體 を成せることから見れば、一切萬物皆原理的に 同根一體 體同用異 體一用多 の根柢を有つのである。然し

本佛の應現論 としての 體用論は、かゝる 十界互具といふ 絶對平等的本體論 を基礎にはするが、其上に立つて、本佛一體を根本としつゝ、應現作用は 十界の各界 各生類 各個體 各人格 に五つて 無限に多 にして 異るといふ意味に於ての 體同用異論であり 體一用多論 である。

十、本佛の應現作用とは、本佛が宇宙的大人格としての自己を根源的一本體として、自己の活動作用を全宇宙の十界に現す、即ち 十界に自己の活動の 迹を垂れる ことであるから、

本佛 即ち 應現の本體をまた 本地 といひ、應現の結果 即ち 應現せられた十界 その一々の人格を 垂迹 といふ。故に 本佛の應現を、 本地垂迹 といひ、 また體一用多 であるから 本一迹多 といふ。

曼陀羅は、本佛の秘密神通無極自在の大力用 を以ての 十界應現の妙用 妙相 を表すものであるから、又即ち、

十界に互るが、應現の本體は 本佛である。應現作用は 十界の總てに互るから、多であり 無限であるが、

作用の根源たる本體は 本佛の一身 である。此に於てか、 本佛とは、千變萬化する無限の應現 を纏めて 一個の統一本佛 なのである。宛も、天月 影を 萬水に浮ぶ が如きものである。

而て應現は 悉く衆生教化のため 即ち對他的のものであるから、他人格を受用したにもせよ、自己人格を變現せしめたにもせよ、凡て本佛の他受用的活動であり、しかも本佛の内證そのものに約していへば、又悉く 自受用的活動でもあるのである。即ち他受用即自受用 自受用即他受用 權即實 實即權、權實融妙 智悲融妙の活作用であるのである。

論じ來つて此に至れば、 本佛と その應現 とは、 體同用異 であり、又、 體一用多である。

但し 宇宙に實在する 差別せる森羅萬象 十界の生類その身土 色心 悉く その現象作用は異なるも、その本質は互に他を具有し、即ち十界互具し 萬有相關してゐて、全く

本佛を中心としての 本地垂迹の作用と妙相 即ち 本迹の關係 本迹觀を示せるもの といふことができる。

或は十界の全體を 遍く教化救済せらるゝ 本佛の體一用多觀 體用不二觀 を顯すもの といふこともできる。

十一、本佛の三輪の妙化 といひ 應現 といひ 本迹觀 といひ 體用論 といひ 何れも本佛を 根源とし、本佛より直接發出する作用（本佛の自己限定作用 としての 十界應現）であつて、この 本佛よりの發出作用 として 曼陀羅觀を、以上述べ來つたのである。

これに對し、人類文明の歴史に於る 一切の善、人格に就ていへば 聖賢英豪とその思念言行、事物に就ていへば 思想教説 政經殖産 文武兩面の道德正義、凡て 吾人日常の生活に於る善心善行 等まで、更に、人間界のみならず、廣く 十界の全體に五つて 一切の善は、悉くこれを 宇宙十界の中心たる 本佛に歸することができ。何となれば、本佛は 宇宙一切の善（詳しくいへば、眞善美聖 等 一切の價值）の根源であるからである。根源 は又同時に 歸着となる。

又、事實に於て、本佛は 三世常恒十方遍滿の大覺者 大救済者 であるから、十界一切の人格 一切の事物を、常に

毎に 一刹那間でも 佛眼を以て 知見照覽し これに無限の慈悲を垂れ 功德を加披し 救済教化の大意志を以て臨んで居らるゝのである。

それゆゑ、人間 乃至 十界一切の 善人格 善事 善行等の内典には、本佛廣大の功德 乃至 善心 と接觸してゐると見ることができらうであらう。従つて、

本佛の直接應現としての三輪の妙化 即ち 本佛が十界の善事を爲す(本佛が直接に自己の身を變現して十界と爲るか、または自己以外の十界の他の人格に降り來つて 宿つて この人格を通じて 或は この人格となつて 善を爲す)といふ 本佛の直接作用 でなくとも、

十界一切の善は 間接に 本佛の恩恵 と見ることができ、即ち、宇宙間一切の善は、その功を推して本に歸するるとき、一大本佛に悉く收まるのである。これを、

本佛に推功歸本する といふ。此に於て、曼陀羅は、常に、

本佛の直接的十界應現の妙相を示す ばかりではなく、間接的にも、

十界一切の功德を本佛に推功歸本した相を示すものといふことができる。

十二、本佛の應現にせよ 本佛への推功歸本にせよ、悉く十界一切の善のはたらき として論じたが、

できるのである。

これと同様に、

本佛のはたらき でない、いはゆる 本佛に間接的な十界の善 といふやうなものでも、再往嚴密にこれを考へるならば、その深き由來や 根柢または内典には、常恒不斷に本佛の神秘不可思議の力が 宇宙に遍滿してはたらいてゐるといはなければならぬ。

かく考へるならば、宇宙間の如何なる善でも悉く 本佛に直接することになり、否 直接してゐるのであつて、間接的といふべき何物もなくなり、かくて又、それらは悉く 廣大無邊なる本佛應現の妙用ならざるはなきに至るのである。

此に於て、最初に論じた 應現の直接作用としての限界なるものは、もはや消失し、三世 盡十方 十界 全宇宙の 無窮 無邊際を盡して、廣大深遠なる本佛應現の神秘が 隱微の間に 周流してゐることが知らるゝのである。これを、

本佛の無縁の慈悲 と稱し、また 本佛の應身常住 或は應身顯本 と稱し、而て、

毎自作是念 といふ 壽量の極隨 は、實にこの 常恒不斷の無縁の慈悲 應身の顯本常住 を道破して 本佛大悲の奥底を傾け盡し 血涌き涙溢れ温情漲る大慈の全象を露呈せられたものなのである。

本佛は、常に善としてのみならず、惡逆醜穢の相 とも現ぜらるゝ。いはゆる反價値的形式に於ても現れるのである。人格にも 非人格にも、事實にも 事物にも 國土山河草木にも、而て 眞妄 善惡 美醜 順逆 いかなる相をもとられる。而も 其が悉く 衆生教化のためならば、皆 善となり、慈悲となり、恩寵と成る。本佛の衆生濟度のための端配すべからざる妙用 であるのである。

かくの如く、本佛は常恒不斷に 全宇宙の一切を知見し 慈悲を垂れつゝあり、而て 衆生が善縁にせよ 惡縁にせよ 其によつて 些かでも 善心 菩提心を發す程の事があるならば、その發心の勝縁は、本佛の神通難思の力用に依るのである、その善心の内典には 本佛の神秘不可思議の力が働いてゐるのである。

十三、かく考へ來るならば、本佛の應現 といふことは 最も廣大無邊に解することができる。

詳しく言へば、上述の所論では、本佛の應現を直接作用とし、その直接の範圍を超えた 間接的な、即ち 本佛の作用に與らざる 宇宙十界の善(乃至、惡の形に於ける善)をも

悉く 本佛に推功歸本して論じたのである。

しかし、推功歸本 といふことは、本佛に間接的な十界の善を、本佛に歸納する、といふだけでなく、本佛の直接作用 即ち 應現をも、この推功歸本の概念の中に入れることが

我本行菩薩道といふも、實にこの 無始の本佛の 無始の 無縁の慈悲の 秒時も息むなきを示して 我等佛子に對する本佛釋尊の衆生濟度の用意の周到懇切なるを慈訓したまへるものであることを知らねばならぬのである。而て我等の持つ佛性内蘊の重發力と これに加はる本佛外緣熏力の重發力との必ず自他合力の成佛得道を設けるは 實にこの本佛應身常住論中の眉目であるのである。而て、

無縁の慈悲 といふは、特に何物を緣する(特に何物を對象とし 何物と關係を結び 何物かを觸發する)といふのではなくとも、直接間接の別なく 常に毎に間斷なく 本佛は慈悲を發射し給うてゐるのである。佛眼を以て視るところ 慈眼に映するところ、盡爾たる億萬の群生 苦海に没在せり、何を以てかこの群生を濟度せんとして、如來秘密神通の力 如來一切自在の神力 淨用不斷の如々の妙體より 發して無限の形聲兩益を示現せらるゝのである。本佛は全く慈悲の結晶體である、佛身は慈悲體なり、佛心は慈悲心なり、說法は慈悲語なり、行化は慈悲行なり、而て 濟度は慈悲の收穫である。三輪の妙化といふも、本佛大悲毎自の一念に歸着する、久遠無始劫よりこのかた毎自作是念 本佛極果の一念 無始感應の一念 本覺本有の一念 意輪感應の大慈悲の一念に 全法界の佛教は歸着する。これが

經典は多く 歴史は長く 事蹟は廣く 感化は深き 全佛

教の統歸であるのである。否これすら尙 人文歴史の上に於ての事だけに過ぎない。況してや

法界(宇宙)久遠無始以來の絕對歴史に於てをや。本佛の慈悲 全法界を包攝して餘蘊無し。佛壽長遠 といひ 顯本遠壽 といふ、これ即ち全法界の功德悉く皆 本佛大悲毎自の一念より發して 而て形聲兩益 三輪の妙化となり、また竟に 本佛大悲毎自の一念に統歸するのである。

宛も 百川の大海に朝宗してまた異途なきが如く、これを、

本佛の大壽量海 といひ

本佛の大功德海 と稱するのである。

法華玄義に云く、

無縁の慈悲 能く法界の依止處と爲る、磁石の音く鐵を吸ふが如く 衆生こゝに歸趣せざるもの無し。又 弘誓 神通 智慧 を以て 衆生を引いて是の法の中に住することを得せしむ。

十四、是の如く 本佛の無縁の大慈悲 絶えず衆生に感應し 衆生に應同して その身は發して遍く十界三千に無限の形聲兩益 三輪の妙化となる。

即ち 本佛は毎にかくの如く 感應常住 應同常住 にして 應現無量無窮 である、これを、
本佛の應身常住 といふのである。而て又これは、

本佛が 大覺無上の大果報を成就し 常樂我淨の大果報に安住せられて、その無碍自在なる身を以てこの大自在の應現を試み、この衆生濟度の大佛事 大如來行をせらるゝのであるから、これを、

本佛報身の大佛事 となし、從つて即ち 報身の常住 報身の顯本 となし、或は、

本佛果上の淨用といふのである。しかも、この報身の内面には、その大覺を以て 全法界の體性たる法性眞如 乃至 十界互具 一念三千の妙體を覺り これと一體となり これを運用し 活用せらるゝのであるから、

報身の内面には 法性眞如身があり、かくて 本佛の應身の無始無縁の慈悲より出づる常恒不斷の應現無窮の大活動は 即ちまた、

報身の無始果上の淨用としての衆生濟度の大佛事であり、又即ち、

法身の周遍法界の大力用であり 大神通力であり 大利益であるのである。これを

本佛の三身常住 と稱し、而て、

三身とは 一大本佛の三大本質 三大徳性 を指すのであつて、

法身とは 實在としての普遍性を指し、
報身とは 人格としての果報性を指し、

宗教性 尊嚴性としては、

久遠實成大恩教主の本佛

無始主師親三徳の本佛、無始佛界緣起十界總統の一大圓佛

根本尊崇 本來尊重 本有尊形の本佛

といひ、これを 本尊 と稱するのである。

しかも 人格性 尊嚴性 實在性 因果性 等といふは 其が皆 哲理及び倫理の基礎、また宗教的根據等を指示するものであるが、本佛としては、一往の觀方或は 區別であつて、互に他を包攝し、竟に 一念に歸し 一體であるのである、而てこれらを一言にして、

伽耶成道に即する久遠本佛の顯本 歴史的佛陀に即する超歴史的教理的本覺佛の實在 と稱するのである。而て

本佛釋尊は十界中の一界たる佛界、この佛界中の一個體たる一人格にして、しかも佛界を攝盡したる無始無終の本佛であり、本覺本有の人格實在者であり、本有尊形の本尊であり、大莊嚴者であり、また 更に 十界(圓具)總統の一大圓佛にして、三千本具の妙能 自在應現の大神通者、三身常住 三世益物の大救護者であり、無始主師親三徳の大恩徳者

無始佛界緣起 智慧常住 化他赴物の大慈悲人格者である。
實に歴史佛即無始三身本來即一の本覺佛は 佛教の精華にして 佛教教義の最高哲理 最高信仰たり、否實にこれ即ち

應身とは 能力としての救濟性を指す。

しかも三身は無始以來 無始無終に 相即一如一體であるから、これを 三身即一身 一身即三身 といひ、これを 如來秘密 といひ、そのはたらきを

神通之力 といふ、即ち如來の内容は微妙深遠にして しかも根本的に統一されてゐることを表す。これを

三身相即無始の古佛といひ、これを即ち實に、
本佛釋尊の人格實在 となすのである。

或は 即ち これを

人格性 個體性としては

無始色心常住の本佛 或は

相好實在の本佛 相相實相の本佛 といひ、

大覺性 實在性としては

本覺本有の本佛

五百塵點乃至所顯の三身無始の古佛 といひ

無始無終(無作三身)の本佛 といひ、

道徳性 因果性としては、

本因本果所顯の本佛、行因得果 修顯得體の本果妙の本佛、

五百塵點久遠の始覺に即する無始本覺の本佛、始本不二の本佛、

實修實證常滿常顯の本佛、といひ、

古往今來 人類一切の思想的最高たり 實に東西文明の 最後の決勝戦は 此處に決せられるのである。予は人類文明の 將來を豫言する。而て實にこの、

本佛釋尊の人格實在 なるものが、十界一切の人格の 原型であり、範型であり、又實にその 目的であるのである。即ち宇宙生命の大目的 宇宙的進化の絶對的目的であつて、これを

佛道修行の完成と稱し、成就相と稱するのである。

以何令衆生 得入無上道 速成就佛身 といふ 壽量總結最後の梵音 は、實に本佛釋尊が 每自作是念 の大慈悲より發して この我が人生の目的 宇宙の目的 佛道の大目的を宣示し給ひ、我等をして無限の大向上を辿つて 遂にこの大目的を達成すべきことを 策勵し 影藉し 嚴誡し 慈訓し 垂示し 教誨し給へるものである。

南無妙法蓮華經

十五、かくして曼陀羅は これを

(A)本佛よりの 發出的觀方として 本佛の 十界應現 三輪の妙化 等となし、又次に

(B)本佛への 歸納的觀方として

本佛に十界が推功歸本したるもの となし、この二面の觀方の何れよりするも 本佛中心となり、而て この本佛の特質は、慈悲常住 感

應常住 救濟常住にして

應身常住の佛身觀 を示すものとなる。けれど 本佛の應現作用なるものの意義が 廣大無邊に 即ち絶對的に解せらるゝに至つて、推功歸本の範疇と 全くその軌を一にするに至り、直接間接の別なく、悉く 本佛果上の淨用としての十界曼陀羅 となり、ひとしく 本佛の大功德海に入る こととなつたのである。

我等も 又實に 本佛を信仰し 本佛と感應する その當處に 直ちに この大曼陀羅の中に入る、中に入つて その尊き一員となり 一座を占めるものとなるのである。實に信仰を以て 心眼を開き見れば 我等は常に この本佛の大功德海に出入しつゝ 止息安住し 生成發展し 無限向上し、

上に 本佛の慈悲・感應・恩寵と 下に 我等の佛子の自覺 佛性開發の菩薩行と 常に相ひ並び 否 相結びつきて 一如融妙の活作用と成り、その深き根柢に於て、常に 本佛神祕の應現に淵源し、また同時に

諸法何物か涅槃に向つて進まざる、一切の萬象 十界の全體 無量の人格 無邊の衆生 悉く 本佛へ歸趣し歸本する 靈の家郷への還元の道 然り 大向上の道となり、かくして常に我々は

本佛に直接し 本佛を實證し 本佛を體現せんとして、永劫の生命の 三世不斷 現當二世 幾多無限の靈應を感得し

來り 感得しつゝあり また感得するを得べく 而て實に感得せなければやまぬのである。

十六、かくて 大曼陀羅は、

- 1 本佛の十界應現の妙相を示す といひ、或は
 - 2 本佛と本佛起用の形聲を示す といひ、或は
 - 3 本佛三輪の妙化を成立せしむ といひ、或は
 - 4 本佛の本述觀を示す といひ、或は
 - 5 本佛の體用不二觀を表す といひ、或は
 - 6 本佛應身常住の内證・外用を顯す といひ、或は
 - 7 本佛に緣せられたる十界の行佛性觀を顯す といひ、或は
 - 8 本佛に十界の推功歸本したる相を表す といひ、或は
 - 9 本佛によつて功德化せられたる十界と成る 等、悉く
 - 10 本佛果上の淨用を示す
- 法界絶對の大事實 となり、かくて何れの方面よりするも、等しく

本佛の佛界緣起觀 本佛の圓慈觀 本佛の大功德觀 を成じ、竟に

本佛を中心として萬象を統一開顯したる 法界の大美を顯現するに至るのである。これを實に

法界實在の本尊 と稱するのである。

十七、是の如く、曼陀羅は、宇宙の實相 として、

本佛を中心としたる十界の實在 即ち 本佛に包まれ 加被せられたる十界 換言すれば

本佛の妙體淨用の中に現じ 本佛に充被せられつゝ、その中に生々活動する 十界の人格實在の妙相 を表すものである。

從つて 曼陀羅は

法界の 大實在觀 大道德觀 大藝術觀 を表すものとなる。けれどし

本佛を中心としたる十界の人格實在 といふ その實體 眞相 力用 の交渉關係 いはゆる 法界の實相と緣起たる

如是 體 相 用 詳しくいへば

本佛を中心としたる十界の人格實在相互の、即ち大法界社會 法界國家 法界歴史 の、

如是 相 性 體 力 作 因 緣 果 報 等の 融妙 融即の關係 即ち いはゆる

法界圓融一念三千 といふ この妙觀、この大實在 この大事實 大真理が、またおのづからはの如き 大道德觀と、更に 調和的大美觀 大文學觀 大藝術觀 を成立せしめるのである。かくして眞善美を一括して、また 神聖なる大宗 教觀を示すものとなる。而て眞善美聖その何れの一に他を包

接することもできるのであるが、今は、これらを總て美に攝して、是の如き 宇宙の大實在そのものとしても、又、かゝる實在を寫象したる 圖顯の形式に於ても、

曼陀羅は、一言にして是をいへば、
宇宙實在の藝術的表現 といふことができるであらう。これが、
本佛釋尊の、即ち 佛教の 即ち 法華經の 而て即ち 日蓮教學の

大宇宙的藝術的創作觀 といふものである。
南無妙法蓮華經

皇紀二千五百九十九年 紀元節
統一團開館第七週年紀念日および明日いさゞ増補す
(つゞく)

豫 告

本多上人第九周年忌を左の通り
相營み可申此段謹告仕候

日時 三月十二日(日曜)

午後二時

於本部法要

午後四時頃

品川妙國寺本堂參集

焼香、展墓

以上

財團 統一團
法人 統 一 團

保 健 の 要 點 (完結)

池 田 龍 一

補述拾項

(一) 食物をよくかむことの利得

第一、口中で食物と唾液とがよく混和し且つ永く接觸する爲に、唾液の消化作用がよく行はれます。

第二、食物が細かく碎け、且つ、柔くなる爲に、胃腸に過度の刺激を與へることがありません。その結果は胃腸を害することがありません。齒の悪い人が大概胃腸病者であるのを見ても、咀嚼といふことが如何に大切であるかを知るのであります。

第三、以上の如く、口中に於て既に幾分の消化を受け、且つ、細かく碎れて居りますから、胃腸内に於て、早く且つ充

分に消化せられます。従つて、營養分が残りなく吸収せられることになりま

す。即ち、少食をしても實質的には深山の養分が得られることになりま

す。よくかめば三杯の御飯も二杯で間に合ふ、といはれるのは是れが爲であります。そのみならず、よく消化する爲に、不消化による有毒物が生じない利益もあります。又本文並にヴァイタミンの條下に於て述べました通り、複雑食をすれば、食物をよく咀嚼して食べる場合と同様(理由は異なりますけれども)少食を以てよく充分なる營養を得られ、且つ、不消化による有毒物も出来難いのであります。それ故、

複雑食をして、然も、これをよく咀嚼して食べるといふことは、二種の利益があ

ることになります。即ち、極めて少食を以て營養が得られ、然も、保健的であるといふことになるのであります。單純食をよくかますに大食するのと、到底、比較にならぬのであります。

第四、力を入れて、よくかみつぶして食べる時には、齒が段々丈夫になつて來るのであります。そのみならず、頭蓋骨の底部も亦發育がよくなります。従つて腦の發育も良好になるといはれて居ります。此處で一言申し度いのは、幼児の咀嚼に就てであります。生後二年半前後位までは、如何に齒が生えてゐても、子供はよく噛むものではありません。殆ど丸呑同様であります。それ故、幼児に食物を與へる時には、この事を考慮して、

大人がよく咀嚼した程度の形にまでつぶして、然る後與へる様にし、同時に子供には嘔むことの練習をさせるのがよいのであります。

(二) カス(纖維)を食へることの効用

よくかんで柔になつて居るカスを食へる時には

第一、胃腸の壁に速度の刺激を與へて消化液の分泌作用を助けます。

第二、胃腸壁に當るこの速度の刺激は、一方に於ては、又、胃腸の蠕動運動を起して、食物と消化液との混和を充分ならしめます。且つ食物の前進輸送を圓滑ならしめます。

第三、胃腸内に於てドロ〜になつて居る食物と、カスとの關係は、丁度、壁とスサとの關係のやうなものであります。即ち、カスは食物の内部に無數に散入して、隙間を作り、消化液をして容易に食物の内部にまで侵入せしめるのであります。その爲に消化は非常に迅速になるのであります。それ故、よく嘔んでカ

スまで食へる時にはお腹に食物のもたれ感を感じなく、且つ、便秘が防がれるのであります。若し、動物が纖維を食へない時には、消化は不良となり、且つ、便秘して、生きて行かれないのであります。牛馬に藁や草を食へさせないと死ぬるのも此のわけなのであります。

(三) 肉や魚や卵や牛乳の如き動物性食品を食へることが出来ない時には

これに代るものとして、豆類を食へるやうにするがよいのであります。大豆や、大豆から作つた豆腐、納豆の如きものに、青菜や南瓜や人参の如きカロチンを含んだものを添へる時は、優良なる代用品となるのであります。

(四) 傳染病豫防注射に就て

一旦病氣に罹れば、その結末がつく迄には、容易ならぬ物心兩方面の苦惱を嘗めます。殊に、それが傳染病である場合には、迷惑の及ぶ範圍は仲々廣いのであります。然し、これ等の傳染病は、豫防注射によつて大抵防ぐことが出来るので

あります。それ故、吾々は、自分の爲公衆の爲に、豫防注射を勵行し度いものがあります。但し、此處に注意しなければならぬことは、

(イ) 豫防注射の効力發生は、人々によつて一様に行かぬ、といふことであります。即ち、體力の弱い様な人には、兎角、効力發生が充分でないのであります。それ故、虚弱質の人は回数を多く注射して置かなければなりません。

(ロ) 豫防注射は、流行時でない時に注射して置いて、何時流行して來ても差支ない様にして置くがよいのであります。何故かと申しますれば、第一回注射の當座は、一時却つて抵抗力が弱くなります。その爲却つて傳染し易くなります。例へば、此處に、細菌を吸つて居ても、抵抗力がよい爲に、未だ發病しないで居る人があるといふあります。此の人は、この儘何もしなければ、發病しないで済むかも知れません。然るに、第一回注射を大量にしたが爲に、一時抵抗力が弱つて、發

病するといふことが有り得るのであります。又、實際に於て、流行時に、注射の爲に發病したのであらう、と思はれる例を往々見受けるのであります。それ故、豫防注射は少くとも年に一度、出来ることとならば年に二度位、流行時でない時に、少量から始めて回数を多く注射して置くやうにするがよいのであります。そして、一度の注射回数は成るべく多くするがよいのであります。例へば、百日咳の豫防注射の如きは、四日目位毎に注射して五回乃至六回位やつて置かなければいけないやうに思はれます。

「バナ、を食へて疫痢になつた」とか、「櫻桃を食へて赤痢になつた」とかいふ様な話をよく耳にいたします。これは飛んでもない事でありませぬ。疫痢や赤痢は、赤痢菌によつて起る病氣であります。赤痢菌を食へさせなければ、赤痢や疫痢には決して罹らないのであります。赤痢菌の附着して居る物を食へたり、或は、赤痢菌の附着して居る手で物

を握つて食へるから、赤痢や疫痢に罹るのであります。又、頑健なる人に於ては、赤痢菌附着の飲食物を食へて居ても、胃腸の抵抗力がよい爲に、發病しないで居る場合があります。この様な時に、櫻桃やバナ、其他の食物飲料を澤山攝つて、胃腸の抵抗力を弱めることがあります。そして、その結果赤痢菌の繁殖を來し、遂に赤痢疫痢に罹ることがあります。然し、要するに、菌さへ食へておなげれば、赤痢疫痢(其他消化器傳染病)には罹らないのであります。櫻桃やバナナが悪いのではないのであります。櫻桃やバナ、や其他果物は何んでも、新鮮なものでさへあれば、皆大切な良い食料品なのであります。食へる人間の心得が悪いから病氣になるのであります。新鮮なる物を、清潔なる水で何回もよく洗つて、蠅をとまらせない様にして、一方には、食へる人の手をもよく洗つて、然る後食へるのであれば、何も傳染病などには罹らないのであります。

赤痢(疫痢)は患者の大便から、コレラは患者の大便及嘔吐物から、チフスは患者の大便及小便から菌が出るのであります。殊にチフスに於ては、普通、解熱後三週間前後まで、大便及小便中に菌を出して居るのであります。稀には、數年間も出して居る人(所謂長期保菌者)があります。それ故、便所と關係あるものは皆危険なのであります。

便所のウジ虫の成長したものが蠅であります。蠅は、便所を往來して、足に糞便と共に菌を付けて、そして食物其他にとまるのであります。又、人の背にとまつて遠くまで行くのであります。又、便所のウジ虫は鼠の好物であります。それ故、鼠は、これを食へるに便所の中へ盛に出入りするのであります。そして、その足で、近所ばかりでなく遠方の臺所にまで、馳けづり廻るのであります。それ故、蠅と鼠とは消化器系統の傳染病の最大の媒介者なのであります。又、人糞肥料を施す野菜や蠅貝の如きもの、或は、

糞尿の流れ込む恐れのある川泉の水を、生（無消毒）で飲用することは甚だ危険であります。患者を取扱ふ人の手や衣服の消毒の大切なることは勿論であります。又、汽車や共同便所の扉のハンドルも、注意せねばならぬ物の一つであります。

然しながら、吾々は、單獨で、完全なる注意を成し遂げることは、到底出来ないであります。さればといつて、現在の衛生思想程度では、萬人の協力を期待することも亦、勿論、出来ないものであります。それ故、豫防注射をして、各自が身體に抵抗をつけて置くより外ないのであります。

(五) 玄米食に就て

丈夫な齒を持つて居る人や、行届いた治療をして、硬い物でも充分かみ得る齒を持つて居るやうな人で、然も胃腸に特別の病氣を持たない人は、玄米飯を食べることが出来ます。よく咀嚼して食べる玄米飯といふものは、七分搗米飯や胚芽

米飯は勿論のこと、半搗米飯と比較しても、後記の如く、甚だ優れた色々の點を持つて居るのであります。然し、今迄白米食をして居た人が、直ちに玄米食をする時には、往々下痢を來すことがあります。それ故、白米食の人が玄米食に移るのには、先づ當分（半月前後）七分搗米とし、次に又當分半搗米とし、更に當分三分搗とし、然る後玄米飯にすれば失敗はないのであります。

玄米飯の炊き方。玄米飯を高壓釜で炊きますと、高熱の爲に、ベタ／＼となるのみならず、ヴァイタミンが壊れてしまひます。又、糊精（デキストリン）が葡萄糖に變化する爲に、甘だれて飽きが來るものであります。それ故、次の如く炊いて、次の如き食べ方をすればよいのであります。

成る可く生きのよい玄米を買ひ求め、玄米一升に水一升六合の割合に仕掛け、木蓋の代りにブリキ製の炊事桶に水を張つて蓋といたします。約二十分間火を燃

やすと沸騰して參ります。この時火力を半減して三十分間程炊くと水気がなくなり、その時極細火にして更に十分間ばかり蒸すのであります。

食べ方。初めて食べる人は、少くとも一口五十回以上噛みしめなければなりません。そして、唾液が充分廻つて甘味が出來れば、咽を通して宜しう御座います。副食物（お菜やお汁）と一緒に食べないで、別々に食べることが肝要であります。

玄米飯は、白米飯に比べると、甚だ多量の礦物質や、纖維や、蛋白質を含んで居ります。そればかりでなく、白米飯の中には殆ど含まれてゐない脂肪やヴァイタミンを含んで居ります。従つて、白米飯と比較にならぬ程の營養價を持つて居ります。それ故白米飯を三杯食べてゐた人は、玄米飯なら二杯か一杯半で充分であります。又、玄米飯は、一日三食よりもむしろ二食の方が、腹正合によいのであります。

此處で注意しなければならぬことは、玄米のヴァイタミンに就てであります。玄米のヴァイタミンは、大部分がヴァイタミンBであつて、ヴァイタミンAは殆どないのであります。それ故、如何に玄米食をしたからとて、副食物によつてヴァイタミンAを補ふことは、白米飯の時と同様にしなければなりません。

(六) 新鮮なる食品と新鮮ならざる食品との相違に就て

野菜でも、芋でも、果實でも、何んでも、食品は總て出来るだけ新鮮なるものを食べなければなりません。そのわけを説明するには、玄米と搗いた米とを比較して見るのが一番よい様に思ひます。

餘り冷くない水の中に玄米を浸して置けば、四—五日後には芽を出して來ます。これは、玄米が生きて居る證據であります。然し、玄米を少し搗いて置いて、これを水の中に浸して見れば、何時迄経つても芽が出て來ません。これは、米が死んだからであります。即ち、米は

玄米までは生きて居りますけれど、玄米を離れて一寸でも傷が附けば、死んでしまふのであります。總て、動植物は、死ぬると直ちに分解腐敗が始まつて來るのであります。分解腐敗が始まれば如何なることになるか、といふ事を米糠に就て説明いたします。

搗きたての糠には、所謂穢臭い匂は無いものであります。然るに、日を経るに従つて、所謂穢臭さが益々強くなつて來ます。これは、空中の細菌が糠の中に繁殖して、蛋白質を分解するからであります。又、搗いて二—三日を過ぎた糠から油を搾り取つて見ます。そうすると、搗いたての糠から得られる油の量位得られないのであります。壊れ難い油の如きものですら、僅二—三日の間に斯も減量して居るのであります。況や、ヴァイタミンの様な壊れ易い性質のものは、毎日々々急速度で失はれて行くのであります。ヴァイタミンよりも更に微妙な、吾々の未知の物質に至つては、無論、瞬く間に無くな

つてしまふのでありませう。即ち、少しでも搗いた米は、糠と同様、日を経るに従つて變質して行くのであります。それ故、玄米飯を食べるといふ事と、白米飯に糠を加へて食べるといふ事とは、意味が大分違つて來るのであります。況や、玄米飯と、七分搗米飯乃至胚芽米飯とは到底同一視することが出来ないものであります。

この例で知られる様に、吾々は、出来るだけ新鮮なる物を食べなければならぬのであります。野菜の如きものは、果實と違つて外皮が柔かでありますから、運搬その他によつて傷だらけになり易いものであります。従つて、微妙の鶴ある物質などはドン／＼無くなつて行くのであります。

傷をつけない様に保存した果實でさへ、新鮮物に比べると時は、ヴァイタミンの如きものは非常なる損失を來たして居るのであります。

割安だからといつて、野菜の買ひ置き

をしたり、或は、大きな粉ミルクの罐を買つたりして、古いものを平気で食べて居る人が、近來殊に多くなつたやうに思ふのであります。これは結局損なわけでありませう。餘り古い物を食べるといふことは、中味の減つた(然も中毒する)物を食べるといふことになるのであります。

(七) 煮た物はかりを食べてはいけな

い理由(ヴァイタミンC)に就て

食物を煮たり焼いたりすると、その中に含まれて居るヴァイタミンCといふ物質が、甚しく失はれるのであります。このヴァイタミンCが吾々の体内に不足いたしますならば、吾々は、貧血に傾き、且つ出血し易くなるのであります。それのみならず、細菌防禦物質の出來方も悪くなり、且つ、毒素を解毒する力も衰へて來るのであります。更に、骨や齒も亦不完全となつて來るのであります。完全なる骨や齒が出來上る爲には、ヴァイタミンDと此のヴァイタミンCとの合力を必要とするのであります。

それ故、ヴァイタミンCが不足いたしましたならば、顔色が悪くなつたり、僅のこゝとに出血したり、或は、消化障礙が起り易くなつたり、胃潰瘍や十二指腸潰瘍が出來易くなつたり、又は、ムシ菌になり易くなつたりするのであります。

このヴァイタミンCが更に甚しく缺乏いたしますならば、吾々は、壞血病といふ病氣に罹るのであります。この病氣は、齒グキが腫れて出血し始めるのがその特徴であります。幼い子供に於ては、その症状が烈しく、諸處の皮膚や骨膜に強度の出血を起したり、或は、關節近くの骨折をも起したりするやうな事があるのであります。

然し、吾々の大多數は、日常、果實や蔬菜の或物を生で食べて居ります。又、軽くゆでたに過ぎない蔬菜をも食べて居ります。これ等の果實や蔬菜は、大概、皆、ヴァイタミンCを含んで居ります。それ故、特別の人を除いては、餘り高度のヴァイタミンC缺乏症は少いのであります。

の肝臓及び新鮮なる生の肉汁以外には、問題とするに足る程の分量を含んで居るものが無いのであります。

次に、このヴァイタミンCといふ物質に就て、特に注意しなければならぬことは、他のヴァイタミンに比して遙に壊れ易い性質を持つて居る、といふ點であります。新鮮物と古物とで、その含有量が大幅違つて來るのであります。又、加工方法の如何によつて、その減り方が大變違ふのであります。例へば、キャベツの如きものでも、鹽漬(一夜漬)にする場合には餘り減らないのであります。然るに、糠味漬にしたものは大變減つてをるのであります。又、新鮮なる大根には甚だ多量に含まれて居りますけれども、澤庵漬の如きものになりますれば、有るのか無いのか解らぬ位になつてをるのであります。(然し、澤庵漬には食慾を増し消化を助ける働きがあります)又、醋酸(酢)や曹達を以て調理する時には、ヴァイタミンCは減るのであります。これ等の點よ

りも更に注意を要する點は、熱とヴァイタミンCとの關係であります。

ヴァイタミンCは、他のヴァイタミン(A、B、D、E等)と異つて、熱に對する抵抗力が甚だ弱いのであります。他のヴァイタミンが、沸騰して居る湯の中心では壊れ難いのに反して、このヴァイタミンCは、攝氏六〇度に於て既に壊れ始めるのであります。然も、甚だ注意を要する點は、加へる熱度と熱を加へる時間の如何によつて、その破壊せられる趣を大いに異にする點であります。今、キャベツを水に浸して加温する場合の試験成績を見ますれば、次の如きものであります。

加へた温度	加へた時間	消失量
六〇度	六〇分	七割
七〇—八〇度	六〇分	九割
九〇度	二〇分	八割

即ち、ヴァイタミンCといふものは、高温でも短時間ならば壊れ方が少く、低温でも長時間ならば甚しく壊れる、といふ性質を持つて居るのであります。それ故、

す。然も、一般日本人は、歐米人に比して、この蔬菜類を多量に食へて居りませう。従つて、日本に於ては、歐米諸國よりもヴァイタミンC缺乏症が少いのであります。然し、煮た物ばかりを多く食べて生ものを餘り食べないやうな人や、人工營養兒の間に於ては、軽度のヴァイタミンC不足症が相當あるのであります。

このヴァイタミンCは、柑橘類や、キャベツや、菠薐草や、大根や、成熟したトマト等の中に、甚だ多量に含まれて居ります。これに次いで、蕪や、青豌豆や、葱や、玉葱や、イチゴや、バナ、等の中にも、相當多量に含まれて居ります。林檎や、葡萄や、桃等の中にも含まれて居ることは居りますけれども、その分量は割合に少いのであります。梨に至つては更に少いのであります。従つて、年越の古い林檎や梨の中にはヴァイタミンCが無い、と考へた方が間違ないものであります。又、動物性食品の中にも、含まれて居ることは居ります。然し、新鮮なる生

菜をゆでる場合には、沸騰してをる湯の中にサツと入れるのがよいのであります。そうすればヴァイタミンCは存外消失せられないのであります。水の時から入れて置いて茹でるが如き茹方をすれば、殆ど無くなつてしまふのであります。要するに、食品の内部にまで熱度がよく透る様な方法を用ゐると、甚しく壊れるのであります。キャベツの油いためや、水を加へずに煮る場合の如きは、假令細かに切り碎いてあつても、熱度は割合内部に届かないのであります。それ故、ヴァイタミンCは、表面の部分では壊れて居りますけれども、内部の方では存外壊れて居ないのであります。

次に、吾々が一日に要するヴァイタミンCの分量は如何程であるか、といふことでもあります。これは、同じトマトにいたしましても、産地により肥料によつて含有量を異にいたします。又、同じ産地でも、新舊によつて含有量が異なります。同じ新鮮さを持つてゐても、未熟のものに

は、含まれ方が少いのであります。その様なわけでありますから、一口にいふことが出来ないであります。然し、大體の處は次に記すやうなものであります。この位の分量を食べて居れば、他の食物からヴァイタミンCが入らなくとも、ヴァイタミンC缺乏症には罹らない、といふのであります。但し、これは、大人一日に要する分量であります。小兒や乳兒は、この半量位を必要とするのであります。

新鮮生キヤベツ	二〇、〇瓦
新鮮生菜蔕草	二〇、〇瓦
生レモン汁	三〇、〇c.c.
生オレンヂ汁	三〇、〇c.c.
新鮮生大根汁	四〇、〇c.c.
新鮮成熟生トマト汁	五〇、〇c.c.
生夏蜜柑汁	七〇、〇c.c.
生洲蜜柑汁	八〇、〇c.c.
古くない成熟バナナ、	一、二〇、〇瓦
生林檎汁	四〇〇、〇c.c.
生葡萄汁	四〇〇、〇c.c.
猫、低溫殺菌牛乳といふのは、攝氏六	

「ミンB缺乏症である」と簡単に片付けられるものではありません。然し、日本人が玄米飯を食べてゐた時代には脚氣といふ病氣は無かつたのであります。又、現代に於ても、玄米飯を食べて居る人の中から脚氣患者が出た、といふ話を聞いたことがありません。又、玄米飯を食べて治らない脚氣患者もありません。これは何としても仕方のない事實であります。玄米にはヴァイタミンBも澤山含まれて居ります。従つて、脚氣とか或はヴァイタミンB缺乏症とかに關する限り（理窟は兎も角）生活問題としては、玄米飯を食べさへすれば問題は無くなるのであります。又、複雑食をして居れば、玄米飯を食べなくとも、脚氣などには罹らないのであります。

このヴァイタミンBは、動物性食品でも植物性食品でも、大體のものに皆多少は含まれて居ります。殊に、酵母や 肝臓や、心臓や、穀類豆類（特にその芽の部分）や、キヤベツや、菠薐草や、トマト

〇度の熱を三〇分間加へてある牛乳のことであります。この牛乳のみを以て乳兒を育てますならば、乳兒は、潜伏性乃至緩慢性壞血病に罹るのであります。それ故、低溫殺菌牛乳と雖、人工栄養に用ゐる時には、ヴァイタミンCを補給しなければなりません。この目的の爲には、新鮮なる生のトマト汁や、新鮮なる生の大根汁や、清潔に洗つた新鮮なる生のキヤベツ汁等が、最も適當であります。林檎汁や、葡萄汁は、大量を要するので不適當であります。又、レモン汁や蜜柑汁は、酸味が強い爲に、牛乳の中に入れる時には、牛乳が固り、哺乳するのに困難となります。従つて、牛乳と別々に與へなければならぬ不便があります。

配達せられた低溫殺菌牛乳を、其儘飲んだり、或は、夏季其儘數時間保存したりすることは、甚だ危険であります。それ故、ヴァイタミンCの消失をば覺悟の上で（他から補給する事として）、今一度煮沸消毒して用ゐるが良いと思ふのであり

ます。

（備考）保健の要點第二項中に於て「成るべく加工を避けて」申しましたのは、このヴァイタミンCや其他不明の物質の消失を防ぎたいからであります。

(八) 脚氣に就て

吾々の體内にヴァイタミンBといふ物質が缺乏いたしますならば、脚氣に罹り易くなりします。又、脚氣患者にヴァイタミンBを與へる時には、多くの脚氣患者が快方に向ひます。又、實驗的に作つたヴァイタミンB缺乏患者は、脚氣患者と甚だよく似て居ります。それが爲に「脚氣はヴァイタミンB缺乏症である」といふやうに宣傳せられて居ります。然し、ヴァイタミンBを如何に大量用ゐても治らぬ脚氣患者があります。又、ヴァイタミンBを與へて治らない患者が、轉地によつて治る時もあります。又、ヴァイタミンBを少ししか含んでゐない食事を攝つてゐても、脚氣に罹らない人があります。脚氣はヴァイタ

の如きものには、甚だ多量に含まれて居るのであります。然も、普通の鍋釜で煮た位の事や酸では壊れないのであります。然し、ツクダ煮の如く長時間煮たり、或は、壓力釜で煮たりする時には壊れるのであります。又、アルカリに對しても弱いのであります。又、水に溶け易い性質を持つて居りますが故に煮汁の中には甚だ多量に流れ出てゐるのであります。それ故、煮汁をば捨てない様にしなければなりません。煮汁の中には、其他色色のものが流れ出て居るのであります。

此處で皆さんの御注意を喚起し度い事があります。それは、脚氣でもないのに脚氣と決め込んで、色々半可通の理窟を云ふ人が殖えた事でありませぬ。私の處に、脚氣脚氣と云つて來られるお母さんが澤山あります。然し、その殆どは、脚氣でなくて、他の栄養不良なのであります。大多數は、偏食による栄養不良なのであります。殊に、ヴァイタミンAと動物性蛋白質と日光とを主なる不足とする栄養

不良なのであります。従つて、その母乳は是れ等の成分が不足して居るのであります。それ故、その乳を飲んでゐるお子さんも亦、これ等の成分の不足による栄養不良なのであります。然も、障礙の程度は、母親よりも子供の方が遙に甚しいのであります。

乳の成分は何であるか、自分は何をどれ程の分量食べて居るか、子供は何程位の乳を飲むものか、と云ふことが解りさへすれば、この様な栄養不良問題は起らなくて済むのであります。然し、一般の人々には栄養學的基礎知識が無く、おまけに、「脚氣はヴァイタミンB缺乏症である。ヴァイタミンBは野菜の中に澤山含まれて居る」といふ不十分なる知識のみが廣まつたのであります。その爲に、野菜を澤山食べさへすればよい、といふ風に考へる人が非常に多くなつたのであります。この氣持は、さなきだに動物性蛋白質やヴァイタミンAの不足勝ちな日本婦人等に東北婦人の間に於て、一層これ等の物

の不足を来たさしめる様になつたのであります。

そのみならず、野菜スープの流行が津々浦々農村の奥までも、驚くばかりの勢を以て行き渡つたのであります。そして、少しでも病氣をした場合、その病氣が何病であるに係らず、先づ飲むものは野菜スープといふ具合になつて来たのであります。毎日毎日、白米飯と、野菜や野菜入りの味噌汁ばかりを食べて、動物性食品を殆ど口にしない様な人々まで、更に野菜スープを飲むといふ様な情ない状態を生じて居るのであります。野菜全部を食へたのでは効力が無いのか。味噌や他の物が混じつて居てはいけないのか」と皮肉が云ひ度くなる程であります。

吾々は如何なる土地に住み、日常如何なる食物を食へて居るか、といふことに思ひ到りますならば、野菜スープなど、一種の私屠物とさへ感ずるのであります。米國の東部地方の如く、野菜を得る

のに甚だ不便であつて、加州から輸送するには、急行列車を以つてしても六晝夜を要するといふ様な土地に住み、且つ、肉食との均衡が取れない様な人々ならば、いざ知らず、日本に於て、殊に野菜入りの味噌汁を毎日澤山食へて居る人々の間に於て、動物性食品の添加といふことが等閑に附せられて、野菜スープの廣まるといふ事は、一種の悲哀といはざるを得ないのであります。指導的地位にある人はよろしく實生活を直視して、懇なる指導をなすべきであらうと思ふのであります。

斯る情勢にある現在日本に於ては、殊に東北地方に於ては、授乳婦の甚多數に於てその乳汁中にビタミンAの不足を來し、更に、蛋白質の量は(優良乳に比して)三分の一乃至五分の一といふやうな甚しい量にまで低下して居るのであります。そのみならず、栄養不良の爲に乳の出ない人が澤山あるのであります。無い財布から金が出ないと同様に、栄養

不良の食事を攝る身體から良い乳の出やう筈がないのであります。

妊婦や授乳婦は子供といふものを餘分に養つて居るのであります。平時よりも(男性よりも)餘程多量の動物性蛋白やビタミンA、Dを要するのであります。それにも係らず、それが極めて僅しか攝られて居ないのであります。その爲に、親子諸共に栄養不良となつて、身體の抵抗力を失ひ、諸種の病氣に罹つて居るのであります。

然し、これ等の栄養に關する事柄を、理論的に正確に知つて、間違なく運用するといふことは、仲々容易の事ではありません。特別の人を除いては殆ど不可能の事柄であります。それ故、現在の國民栄養知識の程度に於ては、結局、本文の第二項に於て述べました處の

一何んでもかまはず色々なものを複雑によく咀嚼してカスまで食へて、常に多少の動物性食品を混入することを忘れないやうに、且つ、成るべく加工を少く

するやうに

といふより外に、適切にして且つ間違の起らない實行指導方法といふものは、無い事になるのであります。

(備考)

植物性蛋白では、吾々は、充分の發育をすることが出来ないであります。然し、これに動物性蛋白が加はりますと、趣は全く別になるのであります。(この理由を説明するのは少し六ヶ敷くなりますから省略いたします)それ故、吾々は動物性蛋白のみを食へる必要はありませんけれども、食物中に必ず少しの動物性食品を添加すると云ふことは、極めて大切なことであります。殊に子供や、妊婦や、授乳婦に於ては、忘れてならないこととであります。

猶、ビタミンEといふものに就て一言附け加へて置きます。このビタミンは、他のビタミン(A、B、C、D)と異つて、成長や抵抗力等の事柄には關係なく、只妊婦にだけ關係があるのであり

ます。このビタミンEが缺乏すれば、不妊となつたり、或は、胎兒の發育が不良となつて流産したり、發育不充分的子供が生れたりするのであります。

このビタミンEは、動物性食品の中には少ししか含まれ居らず、植物性食品の中に澤山含まれて居るのであります。又、このビタミンEは、熱や酸やアルコールに對して強い抵抗力を持つて居ります。但し醋酸(酢)に對してだけは弱いのであります。それ故酢のもの料理はビタミンEを減殺するのであります。然し酢の代りに果物の酸を使用すれば何も差支ないわけがあります。

(九) 胚芽米に就て
胚芽米とは、胚芽の残存して居る特種白米をいふのであります。つまり、胚芽だけ残つて、其他には糠の成分の残つてゐない米一なのであります。従つて、その特徴とする處は、ビタミンBが普通の白米に於けるが如く甚しく消失してゐない、といふ點にあるのであります。

八〇%胚芽残存の胚芽米、換言すれば百粒中の八〇粒に於て胚芽の残つて居る胚芽米に於て、然も新鮮物に於て、そのビタミンB量を調べて見ますれば、玄米のビタミンB量の約三割が残つて居ることとあります。然しながら、一般市販の胚芽米に、八〇%胚芽残存といふやうな優良品は少いのであります。甚しきに至つては、八——一二%しか胚芽が残つてゐないといふ様な劣等品も相當あるのであります。このやうな品になりますと、最早胚芽米としての價値は餘り無いことになるのであります。又、古い胚芽米になりますと、胚芽はあつてビタミンBは逃げて居る、といふやうなものもあります。このやうな品も亦、胚芽米としての價値は無いことになります。それ故、胚芽米といつても一口にはいへないのであります。こうして眞詰めて見れば、胚芽米と普通白米とは、それ程大した差のあるのでは無いのであります。然し、少しでも良いのは良いのであります。

す。良い點を充分理解して魚き度いのであります。猶、胚芽米飯は、玄米に比して、大變軟であるやうに感じられます。然し胚芽米飯は、普通白米飯と異つて、嚼み方が粗相なら、やはり下痢を起します。玄米飯と雖、よく嚼めば(前記)下痢などいたしません。

(十) 樹木と保健との關係に就て

此處でお話いたし度い點は、主として樹木とその周囲の湿度に就てだけであります。樹木の傍の冷々しいことは誠に大したものであります。夏の樹蔭の涼しいのは、勿論、樹木が日蔭を作るからであります。然し、それよりも猶重要なことがあるのであります。

樹木の葉は、その表面から絶えず夥しい水蒸氣を蒸發して居ります。水分が蒸氣に變つて蒸發する時には、蒸發熱といふものを要するのであります。この蒸發熱といふものは、葉の周囲の空氣中から取るより外に取り處がありません。然もこの熱量は相當大きなものであります。

それ故、葉の周囲の空氣は著しく冷くなるのであります。樹の間の風や、森林の空氣が冷々として居るのは此のわけなのであります。従つて、冬に常盤木の傍に居ることは一層の寒さを覚えるのであります。それ故、保健を目的とする植樹は落葉樹でなければなりません。然し、プラタナスの如き葉の裏に毛のあるものは良くないのであります。風の爲にあの毛が吹き散つて、周囲の人の氣管に入るからであります。プラタナス栽培業者の多くが、慢性氣管支加答兒を持つて居るのを見ても、その非保健的樹木なることが知られるのであります。公孫樹の如きもの、風の如きもの、楓の如きものは、或は美的であり、或は詩的でありませぬけれども、何れも成長の遅い樹で急の間に合ひませぬ。それ故、ポプラの如きものを、夏の日蔭になり、冬の日の邪魔にならぬやう、然も眺望の妨げにならぬ様に植ゑるのが、一番の早道かと思ふのであります。

一體日本人は、日本精神といふものを誰でも皆有つて居る筈であります。けれどもそれはよほど鼓舞しないと出て來ないのであります。それは例へば帝國議會を見るとわかる、日本精神が本當に發揮された帝國議會といふものは、日清戦争と日露戦争の時だけであつた。それから今度の議會がやはり良いやうであります。其の他の時は、帝國議會では殆ど日本精神ナンといふものは見ることは出來なかつたと謂つてもよい。日本精神はあるのだけれども、奥の方へ潜んで居つてなかつた。出て來ないのであります。それだから議會ばかりでなく、一般民衆に對しても、日本精神を昂揚する方法といふものが實に野蠻さはまるものである。それを私は今日の紀元節に方つて特に感ずるのです。日本精神の昂揚といつてどうするかといふと、大勢集まつて萬歳を唱へたり、行列を作つて神様の祭をしたり、或は馬の行列をやつたり、その他いろいろな事をして手数をかけてワイワイ言はなければ、日本人には日本精神といふものは出ないのかと思つて、私は驚いて

開館記念會に臨みて

岩野直英

今日は統一會館の創設された七週年記念といふことで、洵にお目出度いことだと思つて私もよろこんで參列を致したのであります。今や日本の國は容易ならぬ非常時に直面して、特に日本精神の昂揚といふ事に、朝野を擧げて努めて居る時であります。此の間から毎朝ラヂオで、日本精神に就ての講話が行はれて居ります。私は努めてこれを聴いて居りますが、もとより自分に日本精神といふものはあるのですから、話によくわかります。けれども此の話が、果して聴く人みなによく徹底してわかるかどうかといふことを考へて見ると、どうも私共のやうに相當に平生其の方面に關心を持つて調べて居る者でない、なか／＼わからぬと思ふ話が多いやうです。ですから折角のあのラヂオ講演も、あまり國民一般の人は聴いて居らぬのではないかと思ふのであります。つまり日本精神といふものを、たゞ日本だけの事で話をするにあんなに貧弱なものである、つまり教が足りないといふことを、私は此の頃ラヂオを聴きながら痛切に感じて居ります。

一體日本人は、日本精神といふものを誰でも皆有つて居る筈であります。けれどもそれはよほど鼓舞しないと出て來ないのであります。それは例へば帝國議會を見るとわかる、日本精神が本當に發揮された帝國議會といふものは、日清戦争と日露戦争の時だけであつた。それから今度の議會がやはり良いやうであります。其の他の時は、帝國議會では殆ど日本精神ナンといふものは見ることは出來なかつたと謂つてもよい。日本精神はあるのだけれども、奥の方へ潜んで居つてなかつた。出て來ないのであります。それだから議會ばかりでなく、一般民衆に對しても、日本精神を昂揚する方法といふものが實に野蠻さはまるものである。それを私は今日の紀元節に方つて特に感ずるのです。日本精神の昂揚といつてどうするかといふと、大勢集まつて萬歳を唱へたり、行列を作つて神様の祭をしたり、或は馬の行列をやつたり、その他いろいろな事をして手数をかけてワイワイ言はなければ、日本人には日本精神といふものは出ないのかと思つて、私は驚いて

釋尊、諸の比丘に告げたまはく、浴室を造作せば五の功德あり、云何が五となす、一には風を除く、二には病癒ゆることを得、三には塵垢を除き去る、四には身體輕便なり、五には肥白なることを得。又曰く、若し過分の飽食は、則ち氣急に身滿ちて百脉調はず、心をして塞せしめ、坐臥安からず。又食を減少すれば、則ち身羸れ心懸かに、意慮固きことなし。(智一阿含經)

居るのです。日本精神を發揚するのに、あんなに大騒ぎをしなければならぬといふのであつたら大變だと思ふ。吾々は今後寸刻も忘れないやうに、日本精神を昂揚して居なければならぬ秋です。その日本精神を昂揚するのに、あれだけお祭騒ぎをしなければならぬのであつたら、とても忙しくて仕事などはして居られないだらうと感ずるのであります。

二三日前にもラチオで梅の節句の話を、女の人がして居りましたが、それもなか／＼忙しい。イヤお赤飯をつくるとか、床の間を飾るとか、子供に話をして聴かせるとか、甘酒を拵へるとか、とても用事が多いのです。考へて見ると私の家などでは、私は紀元節のことです。考へて見ると私の行かなければならぬ、娘は娘で學校に式があるといふので出かけて行く。さうするとなか／＼そんな事をして居る暇は無いのです。さういふやうないろ／＼面倒な事をしなければならぬのだといふことになる、日本精神の昂揚は平生は出来ないとはいふことになる。日本人の日本精神といふものは奥の方にあるので、平生少しも現はれて来ないのだ、それを昂揚するにはあんなにお祭騒ぎをしてやらなければならぬといふことは、文明の國民としては如何にも恥かしい事だと私は思ふのであります。

それで私は惟ふのに、これはやはり日本精神を發揚するには、日蓮上人の法華經を中心とした教が一番良いと思ふ。法

華經の教といふものは外國から来た教ではあるけれども、こ

れが一番よろしい。何故かといふと、日本人にはチャント日本精神といふものがあるのだけれども、それを昂揚する教といふものが日本には足りないのです。たゞ古事記の話かナニかして、天業恢弘とか、八紘一字とか言つて居るけれども、みな何だか知らずに言つて居る。今まで私がラチオで聞いた話で、八紘一字が本當に説明の出来たと思ふ人はありませんでした。そこで日蓮上人の傳へられた法華經の教といふものに依ると、チャント本佛といふものを祖先として、地涌の菩薩が現はれて、その地涌の菩薩が釋尊の國土を引受ける、さうしてその上首上行菩薩といふものが、常に釋尊の代りになつて天下を導いて行くといふことになつて居る。それは深い教の上から照すと日本の國に於ても實際それが首肯されるものであります。けれども不思議な事には、どういふ力があるのか知らんけれども、日蓮上人の紹介して呉れた法華經に接すると、それがピンとよくわかつて来る。その不思議な力は私にも説明は出来ない、どういふものか、心の奥底から感激させる力があるのであります。さういふものを用ひて日本精神の昂揚をはかれば、ナニもお祭騒ぎをしてワイ／＼やつて、時間を費したり、費用を掛けたり、いろ／＼な事をする必要はないと思ふ。今日のやうな騒ぎをするのは、まア已むを得ずしてするのだ、教といふものが無いからあゝいふドン

チャン騒ぎをするのであつて、これは遺憾な事だと思ひます。

それだから私は此の統一團の如き、成立も純粹であるし、また舊い教團のやうに悪い癖がまだ附いて居らない、斯ういふ純粹な所で、立派な日蓮上人の教を以て日本精神の昂揚をするといふことが、今日は何よりも必要だと思ふ。殊にたゞ教のみならず、これには非常に良い方法がある。それは何であるかといふと、たゞ「南無妙法蓮華經」と唱へる方法である。それを唱へる間に、吾々の日本精神といふものはウンと昂揚出来るのですから、これは金も掛らず、時間も潰れない。寝ても覚めてもこれをやつて居れば、それで日本精神の昂揚が出来るといふ、説明も出来る。實行も出来るのであるから、こんな良い方法はない。それに加ふるに立派な本化の教といふものが説かれるといふことになれば、實に有難い事であります。

今日やかましく言はれるところの東洋の平和を確保するには、吾々が東洋の指導者とならなければならぬ。それには先づ日本人がしつかりした日本精神を發揮して、眞に東洋の指導者たる人格を具へるやうにして行かなければならぬ。その修養には、今日第七週年を迎へた此の統一會館に於て説かれる教に依るのが一番よろしい、斯ういふ結論になる譯であります。私はさういふ希望を以て今日は出席したのであります。

今までも篤志の人々が集まつて、此の統一團といふものを維持し、發展せしめて来たのであります。併しながら會館は何と言つてもこれだけの小さな建物である、一パイ人が入つたところで知れたものです、まだ決して非常に盛んとは言はれない。それに就ては、いろ／＼發展方法を考へて、所謂策動をするといふやり方は世の中に澤山ありますけれども、私は統一會館はさういふ世間で流行して居るやうな發展策を講ずることを希望しない。たゞ、今申すやうな純粹の教、統一團の創立者である本多日生上人の主張された教、即ち今まで私が申したやうな事を中心として此の教を弘めるのには、こんな小さい建物では勿體ない、どうかして之をモット大きくして行く方法はないだらうかと考へるのであります。それには皆さんが熱心に三寶に歸依して、さうして團結されることとが先づ第一であります。其の上に更に發展の方法を講じようといふならば、私も老人ではありますけれども、諸君と共に微力を盡して見たいといふ氣持が、心に今尤も満ちて居る次第であります。どうかさういふ意味で皆さんも今後一層の御奮闘をお願い致します。(拍手)

(文責在記者)

只今岩野閣下のお話で、今日のやうなお祭騒ぎの多いことが、必ずしも建國の精神が盛になつた譯でもでもないといふことを承りましたが、ともかく今日のやうに建國の精神とか、日本精神とかいふものがやかましく言はれることは、私の記憶では今までに無かつたことであります。日清戦争の當時の事は私は知りませんが、かなり大騒ぎをやつたやうに思はれますが、其の時の記憶では、かなり大騒ぎをやつたやうに覚えて居ります。後に記録などを見ますと、只今お話がありました通り、議會に於ても本當の舉國一致の精神で、野黨も與黨も一致して時の政府を支持したといふ、洵に美はしい情景が書かれてあります。定めしそれは嘘ではなかつたやうに思はれるのであります。

さうすると、ナニも今日初めて建國の精神とか、日本精神が盛になつた譯ではないやうに思はれますけれども、私は何事もスグ算盤から勘定する男であります。これはまア商賣で仕方がないと思ふのですが、その私が、今日の時代が今までに経験の無いやうな日本精神の發露だといふことをどうして考へたかといふと、それは政治の上でもありません、また思想の上でもないものであります。算盤の上で、これ程國家意識が熾んになつたことは記憶が無いのであります。またいろ／＼

な書物などを讀んで見ましても、私の記憶が間違つて居ないことがハッキリ證明されて居るのであります。建國の精神といふやうなものは、算盤玉に乗るものではないやうにお考へてありませうけれども、私共商賣人がやりませうとハッキリ算盤の上に乗るものであります。

日露戦争及び歐洲戦争ともに——歐洲戦争は大した困難でもないでありませうが、とにかく戦争といふ名が附いて居りましたが、その當時の經濟状態は、悉くみな純粹の自由主義、純粹の個人主義でありました。日露戦争では、戦争が次第に發展して物資が不足を告げる、また紙幣の發行がだん／＼殖えて参りまして、自然に物價が騰貴を致しました。そこで物を造つて居る人、或は物を持つて居る人は、製造工業家といはず、商人といはず、悉く莫大な利益を得たのであります。今で言へば所謂戦争成金ともいふのであります。さうしてその儲けた利益は、極く少量が、或は自分の廣告の爲か——非常に悪く解釋するやうでありますけれども——或は賣名の爲に、極く僅かばかりが國家に獻金されただけで、あとのものは大した増税も受けず、みな自分の私のものでして懐ろに入れて、社會もそれを不思議と思はず、自分も亦決して悪い事をしたと考へずに、天下の財物を私有致した譯であります。日露戦争當時のことはよく知りませんが、歐洲戦争に至りますと、ハッキリ私は記憶を致して居りますが、其の當時

は、國家の強儀、戦争といふやうな事の爲に、少數の個人が利益を得るといふことが果して善い事か悪い事か、さういふことは國家的の意味から見て正しいか正しくないかといふやうなことを、論議された事すらないのであります。機敏な人間、算盤の速者な人間が素早く儲けて、それは非常に成功したといふことで萬事終つて居つたのであります。私が算盤に乗る、乗らないと言つたのは此點でありまして、國家主義と申しますか、國家的色彩といふものがモツとハッキリして居つたならば、斯ういふ事が當然問題になつて宜い筈であつたのであります。

然るに今回の支那事變となりまして、これがよほど進んで参りまして、政府の聲明もありました通り、全國民が悉くみな犠牲を拂ふのだ、此の困難に際して唯一人の僥倖を得る者があつてはならないのだ、誤つてさういふ利益を得た者は、悉く國家の爲に之を捧げなければならぬのだ、すべての國民の所有する財物は、すべて國家と運命を共にすべきものである、偶々個人の名前に依つて記録されて居ると雖も、其の財は悉く國家が其の使用の方法も命令をし、又これを實際に徴發し、使用し得るのだといふことになつてをります。國民は之に對してどういふ考を持つて居るか申すと、初めの内はどうも面白いやうな氣持がして、自分の物が思ふやうに使へない、そんな馬鹿な話はない。或は又仕事をしても儲か

らない、或は儲けてもみな取上げられるといふやうなことで、危険を冒して、智囊を捧つて事業をする者は無い、さういふ者が無ければ自然政府の言ふ生産力擴充といふことも不可能に終るではないか。斯う言つて自由主義的に解釋して居る者が、最初の内はありましたが、戦争がだん／＼進むにつれて、さういふ者は次第に消えて参りまして、今日では、自分の力で儲けたものだといふことを考へて居る者は殆ど無いのではないかと考へて居ります。

そこで考へて見ますと、お釋迦様の教は、斯ういふ風に國家が對立して戦争をし合ふ、人間同士が綱を執つて殺し合ふといふやうな世界であつてはならない。一番の理想はすべて一つの大きな佛土になつて、國民的意識も、人種的差別も悉く無くなつて、渾然として融和した一つの人類社會が生れてよい、斯ういふ教であるやうに私は思つて居ります。又私もさういふ社會を人間が寄つて建設しなければならぬ筈だ、これが極樂淨土でも申しますか。隨て今日の對立的の國家意識が終局のものでないといふことは、宗教上ハッキリ考へてよいと思ふのであります。日本精神とか國民精神とかいふことは、結局は最高の佛土建設の爲の一つの段階として必要なるものであるのではないだらうか、斯う思ふのであります。ところが人間といふものは、如何にさういふ事が理想であつても、自分の物と人の物とを混同して一緒に使ひ合ふとい

ふことは、無い方の人は都合が好いでせうけれども、ある方の人はいやなものであります。況して自分の汗水垂らした財を誰のわからない人に使はれるといふやうなことは、甚だ不愉快を感じるものであります。しかしこれがだん／＼進むと自分ばかり持つて居れば宜いといふのでは不自由だ、それでは面白くないといふので、まづ最初は妻子くらゐには分けて與へる、又兄弟くらゐにもだん／＼分けて與へるやうになつた。即ち自分といふ小さなものから、先づ家族ぐるゐの所に擴大されて來た譯であります。又それから少し進んだ人は、自分の家族だけよければ宜いといふのではいけなから、自分の關係した事業があれば、其の従業員の家族もよくあつて欲しい、また東京市に住んで居れば東京の全體が良くあつて欲しいといふやうに、だん／＼と重大されて行く譯であります。さういふ風に考へて居りますと、今度の支那事變に依つて、日本の國民が經濟的に——私の申すのは經濟の方面であります——國家といふ所まで引上げられて來たのだ。國家の爲に自分の財が使はれるならば決して惜しいと思はない。また自己の蓄積した財といふものも、所詮は國家の安危の場合に捧げるべきものだといふことが、オット二千六百年近くになつて初めてわかつて來たのではないかと思ひます。

私は斯う考へまして、これは非常な日本人の進歩であるやうに思ひます。岩野閣下のお話のやうに、騒いでばかり居て

も駄目ナンであります。金錢とか財物とかいふものは、さういふ思想的の觀察から離れまして、とにかく自分の持つて居る物が人の物になるとか、自分が金を儲けても國家に取上げられてしまふとかいふやうに、極めて經濟的の限界はハツキリして居るものであります。その點に於て、日清、日露、歐洲戰爭といふものを經た當時の經濟的の觀念と、今日支那事變を迎へた時の國民の經濟的の觀念とは、全然違つて來たと謂ふことが出来るのであります。これは私は非常な大きな飛躍であり、進歩である、こゝで初めて學校で言へば最高學府に入つたのだと思ひます。即ち自己といふものが少くとも國家的にまで擴大されて來たのであつて、こゝでシツカリ勉強すれば、これは卒業するまでに何百年かゝるか、何千年かゝるかかわかりませんが、それから後に初めて佛様の仰しやるやうな、國家を超越し、人種も超越し、一切のものを超越して、世界が渾然と融和して一つのものになる、所謂常住の佛土が建設されて行くのではないか、斯ういふことを私は考へて居るのであります。

今日は此の會館の記念日を迎へまして、私共はさういふ意味で益々正法の宣布に精進して參りたいと考へて居ります。どうぞ今後とも皆様の一層の御後援をお願い致しまして、御挨拶に代へる次第であります。(拍手)

(文責在記者)

記事

本部 團報

感謝會 寒三十日も大寒一結、末弘がりに極めて意義深く満了した。そこで五日の立春が幸ひ日曜日に相當するので、朝六時半本部御實前に立正奉行満了感謝會を営み、皆勤者六名と精勤者二名外數十名に夫れ／＼賞品と修了證を授けた、その光景が極めて莊嚴崇重であつたから、式中感激に堪へずして自ら歡涙の聲高まつて遂に一同數分間齋唱合掌甘露の泪に咽んだこと前代未聞であつた。これこそ眞の感謝淨會であつたと永く吾人の胸底深く刻せられる、泌々行の大事を思はせられた。

開館記念 紀元佳節は本部統一會館の又開館日に相當する、本年は第七周年を迎えたので、有志相集つて法筵を開いた。法要後二時より講演會に移り、始めに磋商常任理事から、近頃新に入團された人々も多い、夫等の方の御参考にもなればとて、本部の略歴史を一部紹介され以て本團の使命を明かにし、小林一郎先生は「大乘心」と題して近來大乘なる言葉の濫用を諷め、佛教の深淵な意味から現在吾人の日常に際して行くべき心得方を懇説された。續いて岩野少將、上田理事長は前掲のお話しあり、河合勝明氏は法國冥合より本團の態度

を論じ最後に和賀義見師閉會の辭として、時難克服の術策は宗教の力と經倫の力に依つべく、それには日蓮上人に依りこの一大文明が我國から世界に實現されるべきだが、この大上人の御精神を顯はすべく本多上人が本團に力を傾けられてゐたのであるから、一同は教の體系を明かにして、彌々日本精神の根柢を培ひ眞に我が國の理想が達成せられるやう佛陀神明に祈つて以て行學二道に精進し、廣宣流布の上に一分の御用に立たして戴くことを誓願したい。爰に皆様の御協力を希ふと結ばれた。

本郷日常氏の即詠

ななとせの月日は早しそれをしも

待たで咲きつる法の花かな

統一の名にふさはしき此のやかた

梅の香りや心ひとつに

記念の品を手にしつ午後四時半數會に臨み、陸軍畫報社中山君が畏くも雲上より御下賜の御菓子と、巻煙草を持参されたので、少し宛ではあつたが一同唱題、夫れ／＼分配することを得たことは洵に有難い事であつた。

日曜清集 毎週の日曜日早朝の勤行と、午後の法話會が催されて多數參加されてゐる。

勤行の團扇太鼓や春の山

朝日さす梅ふくよかに座談かな

元 義

薫

御書講座 小林一郎先生の立正安國論講義もあと僅かとなつた、次には撰時鈔の講話をさるゝ豫定である。御誘合せ奮つて御來臨をお薦めする。

幹部會 二月十八日(土)正午幹部會を日本橋上田理事長の事務所に於て開催、柴田、岩上兩理事の外全部出席、二三の重要協議を決定した、それは漸次具體化するに到るであらう。

福島支部報

二月八日 午後三時半より、磯部先生を迎へ三年生の送別會を兼ね例會を高商内如春莊に開く。集れる求道者は校長先生吉松先生、高橋先生、支部よりは岩井支部長外五婦人が參會され、總じて三十四名であつた。清新な感じのする部屋で、讀經唱題に始まり、先生のお話は信仰の歸結たる「法華經の題目」に就て先づ諸法實相の中心には壽量の本佛在し、その本佛を中心として各其位に住する像こそ大曼荼羅である。さて吾々は佛にならふと努めてゐるのであるが、その爲には偉大なる善根を積まねばならぬ、それには佛に仕へるには不加である。佛に仕へるの最上の道は唱題であると。次に法を説明され、本佛と題目と離すべからざるを主張され、唱題の功德を昂揚された。而して如來使である日蓮聖人の御精神が題目であると結ばれた。お話が終ると送別會に入り、校長先生と、岩井支部長のお話あり、後皆一同榮しく御辨當を頂い

た。六時半和やかな空氣の中に卒業生の信心増進を祈つて散會した。

猶例會の翌日から、寒行會に擬して一週間、毎朝始業前二十分間、七八名ではあつたが熱烈な唱題行を勵んだ、勿論中心は三年の本多君であり、二年の長谷川君、鈴木君、一年の首野君等は皆勤の榮冠を贏ち得たことを歡ぶ。

同日夜

於中村様方七時半頃よりお勤めをなす。本日は「令法久住」と題されてお話あり。日蓮聖人の御出書は、令法久住の爲である。凡そ佛教は正法にして統一あるべき教なるにも不拘幾派にも別れてゐる。而して世は末法である、於茲日蓮聖人は寶塔品の令法久住の佛勅を奉じ、日本國東海に御出現になり、生まれぬ慈悲心は發露して折伏行となつたのである、この折伏は今に尙繼續してゐる。令法久住の實際遺方は法師品に詳しく示されてゐる所謂衣座室の三軌である。今やこの重大時機に臨んで日本は勿論、支那に於ても日支提携上特に令法久住せしめる事は大切であつて、それが爲には吾々正定衆の協力が最も大事である、と正法興隆の責任を負はしめられ、一天四海皆歸妙法の時機は正に熟し切つてゐると結ばれた。法悦に滿されつゝ座談會に入り十時頃散會した。

(橋本報)

團費誌料維持費及寄附金領收

(自一月二十一日至二月二十一日)

一金五圓也	横濱	宮本正三殿	一金拾圓也	同	鈴木建固殿
一金貳圓貳拾錢也	高岡	林長吉殿	一金貳圓貳拾錢也	同	伊藤夏子殿
一金五圓也	北京	高部靜子殿	一金貳圓五拾錢也	同	山田英二殿
一金拾六圓也	東京	和賀義見殿	一金貳圓貳拾錢也	同	伊藤夏子殿
一金貳圓貳拾錢也	名古屋	彌重まさ殿	一金貳圓五拾錢也	東京	久野柳子殿
一金貳圓五拾錢也	山口縣	田澤留吉殿	一金參圓也	同	宇野博順殿
一金五圓也	東京	岸野藤右衛門殿	一金貳拾圓也	同	柴田武治殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉	片岡別莊殿	一金貳圓貳拾錢也	同	高野瑞殿
一金貳圓貳拾錢也	濱松	彦坂寅吉殿	一金貳圓五拾錢也	同	長澤信一殿
一金參拾圓也	東京	中山正男殿	一金參圓也	同	野口英司殿
一金貳圓也	同	櫻井徳右衛門殿	一金貳圓貳拾錢也	静岡縣	玄妙寺殿
一金壹圓也	大阪	岩見實太郎殿	一金壹圓也	東京	布施浪透殿
一零貳圓五拾錢也	同	東峰太郎殿	一金五圓也	同	下妻有良殿
一金貳圓四拾錢也	富山	石黒政次郎殿			
一金壹圓也	府下	唱行會殿			
一金貳圓貳拾錢也	東京	石川顯隆殿			

右難有領收入帳仕候也(以是代領收證)

財團法人統一團會計

長期建設のため



◆現在契約高三十一億餘萬圓

墨島區巢鴨町五ノ一、一二四番地

白井みよ

電話大塚三、三八四番

命生本日 てき大 なか確

感謝

福島の中村美津様より御身邊の貴金屬類を處理されて其の一分を愛國獻金され、其の一分金壹百圓也を護持正法の爲め本團へ御寄贈下さつたのである。何といふ崇高なお心持ちではないか。眞に國を愛する者は教を護らねばならぬ。立正安國を色讀される中村様の御信仰はお美しい次第である。爰に甚深の感謝を捧げる。

南無妙法蓮華經

財團統一國會計
法人

統一定價

一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新聞共直ニ御通知ノ事

昭和十四年二月二十五日印刷納本
昭和十四年三月一日發行

(第五百二十八號)

不許複製

編輯部 滿事
東京市小石川區菅羽町六ノ十七
發行人 磯部 滿事
東京市四谷區内藤町一
印刷人 山田 英二
東京市小石川區菅羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

發行所 財團統一國會計
法人

東京市小石川區菅羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
番替東京九四二〇番

